

うござんす、お談話を一つ、お聞かせなすつて下さいましな。

學圓 談話をせい、……談話とは？

百合 方々旅を遊ばした、面白い、珍しい、お話しでございます。

學圓 其の談話を？

百合 はい、お代のかはりに頂きます。貴客には限りませず、藥賣の衆、行者、巡禮、此の村里

の人たちにも、お間に合ふものがございますして、其のお代をと云ふ方には、誰方にも、お談話を

一條づ、伺ひます。澤山お聞かせ下さいますと、お泊め申しもするのでござんす。

學圓 む、此こそ談話ぢや。(と小膝を拍て)面白い。話しませう。……が、扱て談話と云うて、

差當り——お茶代に成るのぢやからつて、長崎から強飯でもあるまいな。や、思出した。然も

此の越前ぢや。

晃 (細く障子を開き差覗く。)

時に小机に向ひたり。双紙を開き、筆を取りて、客の物語る所をかき取らむとしたるなるが、

學圓と雙方、ふと顔を合せて、何とかしけむ、燈火を弗と消す。

百合 どんなお話、もし、貴客。

學圓 ……時に此處で話すのを、貴女のほかに聞く人がありますかね

百合 否、外にはお月様ばかりでござんす。

學圓 道理こそ燈が消えて、あ、蚊遣の煙で、よくは見えぬが、……納戸に月が射すらしい。

——お待ちなさい。今、言ひかけた越前の話と云ふのは、縁の下で牡丹餅が化けたのです。た

とへば、こゝで私がものを云ふと、其の通り、縁の下で口眞似をする奴がある。村中が寄つて

集つて、口眞似するは何ものぢや。狐か、と聞くと、違ふ。と答へる。狸か、違ふ、獺か、違

ふ、魔か。天狗か、違ふ、違ふ。……しまひに牡丹餅か、と尋ねた時、應と云つて消え失せた

と云ふ——其の話をする氣であつたが、……まだ外に、月が聞くと言はるゝから、出直して、

別の談話をする氣に成つた。お聞きなさい。此は現在一昨年の夏——

一人、私の親友に、何か豫て志す……國々に傳はつた面白い、又異つた、不思議な物語を集め

て見たい。日本中残らずとは思ふが、此夏は、山深い北國筋の、谷を渡り、峰を傳つて尋ねよ

う、と夏休みに東京を出ました。——其切、行方が知れず、音沙汰なし。親兄弟もある人物、

出来る限り、手を盡して捜したが、皆目跡形が分らんから、われ々友だちの間にも、最早や

世にない、死んだものと斷念めて、都を出た日を命日にする始末。いや、一時は新聞沙汰、世

間で豪い騒ぎをした。……

自殺か、怪我か、變死かと、果敢ない事に、寄ると觸ると、袂を絞つて言交はずぞ！ あとを

隠すにも、死ぬのにも、何の理由もない男ぢやに、貴女、世間には變つた事がありませうな。

百合 あゝ、貴客、貴客、難有う存じます。……眞個に難有う存じました。(とにべなく言ふ。)

學圓 そんなに禮を云うて、茶代のかはりに成るのですかい。

百合 最う澤山でございます。

學圓 それでは面白かつたのぢやね。

百合 ……おもしろいのは、前の牡丹餅の化けた方、あとは澤山でございます。

學圓 扱て談話は此からなんぢや、今は眞個の前提ですが。

百合 何うぞ、……結構でございますから、……而して貴客、既う暗く成ります、お宿をお取り遊ばすにも御不自由でございませうから。……

學圓 いや、談話の模様では、宿をする事もあると言はれた。私も一つ泊めて下さい、——

此の談話は實がありますから。

百合 先刻は、貴客、女の口から泊りの事なぞ聞くぢやない。……其の言について、宿の無心でもされたら何うするとおつしやつて。……最う、清い涼いお方だと思ひましたものを、……女ばかり居る處で、宿貸せなぞと、そんな事、……もう、私は氣味が悪い。

學圓 氣味が悪いな？ 牡丹餅の化けたのではないですが。

百合 こんな山家は、お化より、都の人が可恐うござんす、……さ、貴客何うぞ。

學圓 此は、押出されるは酷い。(不承々に立つ。)

百合 (續いて出で、押遣るばかりに) 何うぞ、お立ち下さいまし。

學圓 婦人ばかりぢや、とも角うも言はれぬか。鉢の木ではないのぢやが、蚊に焚く柴もあるものを、……常世の宿なら、恚う情なくは扱ふまい。……雪の降らぬがせめてもぢや。

百合 眞夏土用の百日早に、たとひ雪が降らうとも、……(と立ちながら、納戸の方を熟と視て、學圓に瞳を返す。) 御機嫌よう。

學圓 失禮します。

晃 (衝と蚊遣の中に姿を顯し) 山澤、山澤。(ときつぱり呼ぶ。)

學圓 おい、萩原、萩原か。

百合 あれ、貴方。(と走り寄つて、出足を留めるやうに、膝を突き手に晃の胸を壓へる。)

晃 歸りやしない、大丈夫、大丈夫。(と低聲に云つて) 何とも言ひやうがない、山澤、まあ——

まあ、此方へ。

學圓 私も何とも言ひやうが無い。十に九ツ君だらうと、今ね、顔を見た時、又先刻からの様子

でも然う思つた、けれども、餘り思掛けなし——（引返して柵に來り）第一、其の頭は何うし
たい。

晃 頭も何うかして居ると思つて、まあ、許して上つてくれ。

學圓 埃ばかりぢや、失敬するぞ、（と足を拭いたなりで座に入る）いや、其の頭も頭ぢやが、白
髪は何うぢや、白髪はよ？……

晃 此か、谷底に棲めばと云つて、大蛇に呑まれた次第ではない、こいつは假髪だ。（脱いで棄て
る。）

學圓 は、あ……（とお百合を密と見て）勿論ぢやな、其の何も……

晃 こりや、百合と云ふ。

お百合、座に直つた晃の膝に、其のま、俯伏して絶つて居る。

學圓 お百合さんか。細君も……何、奥方も……

晃 泣く奴があるか、涙を拭いて、整然として、御挨拶しな。

と言ふうちに、極り悪さうに、お百合は衝と納戸へかくれる。

晃 君に背中を敲かれて、僕の夢が覺めた處で、東京へ歸るかつて憂慮ひなんです。

學圓（お百合の優しさに、涙もろく、ほろりとしながら）いや、私の顔を見たぐらるで、萩原—

——此の夢は覺めんぢやらう。……何、い、夢なら、敢て覺めるには及ばんのぢや……しかし萩
原、夢の裡にも忘れまいが、東京の君の内では親御はじめ、

晃 む、。

學圓 君の事で、多少、それは、壽命は縮められたか分らんが、皆先づ御無事ぢや。

晃 あ、然うか。難有い。

學圓 私に禮には及ばない。

晃 實に濟まん！

學圓 扱て此は何うしたわけぢや。

晃 夢だと思つて聞いてくれ。

學圓 勿論、夢だと思つて居る。……

晃 委しい事は、夜すがらにも話すとて、知つてる通り……僕は、それ諸國の物語を聞かうと
思つて、北國筋を歩行いたんだ。處か、自身……僕、其ものが一條の物語に成つた譯だ。——

魔法つかひは山を取つて海に移す、人間を樹にもする、石にもする、石を取つて木の葉にもす
る。木の葉を蛙にもすると云ふ、……君も此處へ來たばかりで、もの語の中の人に成つたらう
……僕は最う一層、其の上を、物語、其のものに成つたんだ。

學圓 薄氣味の悪い事を云ふな。では、君の細君は、……（云ひつゝ、憚る。）

晃（納戸を振向く）衣服でも着換へるか、髪など撫つけて居るだらう。……襖一重だから、背戸へ出た。……

學圓（伸上り納戸越しに透かして見て）おい、水があるか、蘆の葉の前に、櫛にも月の光が射して、假髪をばづした髪の艶、雪國と聞く故か、まだ消残つて白いやうに、襟脚、脊筋も透通る。……

……凄（すこ）いまで美しいが、……何か、細君は魔法つかひか。

晃 可哀相な事を言へ、まさか。

學圓 ふん。

晃 此の土地、此の里——此の琴弾谷が、一個の魔法つかひだと云ふんだよ。——

山澤、君は、此の山奥の、夜叉ヶ池と云ふのを聞いたか。

學圓 聞いた。然も其の池を見ようと思つて、今庄驛から五里ばかり、態々此處まで入込んだのぢや。

晃 僕も一昨年、其の池を見ようと思つて、唯一人、此の谷へ入つたために、恚う云ふ次第に成つたんだ。——こゝに鐘がある——

學圓 ある！ 何か、明六つ、暮六つ……丑満、と一晝夜に三度鳴らす。其の他は一切音をさせ

ない定ぢやと聞いたが。

晃 然うだよ。定として、他は一切音をさせてはならない、と一所にな、一日一夜に三度づゝは必ず鳴らさねばならないんだ。

學圓 其は？

晃 こゝに傳説がある。昔、人と水と戦つて、此の里の滅びようとした時、越の大徳泰澄が行力で、龍神を其の夜叉ヶ池に封込んだ。龍神の言ふには、人の溺れ、地の沈むを救ふために、自由を奪はるゝは、是非に及ばん。其のかはりに鐘を鑄て、麓に掛けて、晝夜に三度づゝ撞鳴らして、我を驚かし、其の約束を思出させよ。……我が性は自由を想ふ。自在を欲する。氣まゝを望む。ともすれば、誓を忘れて、狭き池の水をして北陸七道に漲らさうとする。我が自由のために、世の人畜の生命など、ものの數ともするのでない。が、約束は違へぬ、誓は破らん——但し其の約束、其の誓を忘れさせまい。思出させようとするために、鐘を撞く事を怠るな。——山澤、其のために鑄た鐘なんだよ。だから一度でも忘れると、立處に、大雨、大雷、大風とともに、夜叉ヶ池から津浪が起つて、村も里も水の底に葬つて、龍神は想ふまゝに天地を馳すると……恚う、此の土地で言傳へる。……其のために、明六つ、暮六つ、丑満つ鐘を撞く。……

學圓 (乗出でて) 面白い。

晃 いや、面白いでは濟まない、大切な事です。

學圓 如何にも大切な事ぢや。

晃 處で、其の鐘を撞く、鐘撞き男を誰だと思ふ。

學圓 君か。

晃 僕だよ。即ち萩原晃が其の鐘撞夫なんだよ。

學圓 はてな。

晃 こゝに小屋がある……

學圓 む。

晃 鐘撞が住む小屋で、一昨年の夏、私が来て、代るまでは、彌太兵衛と云ふ七十九に成る爺様が一人居て、これは五十年以來、如何な一日も缺かす事なく、一晝夜に三度づ、此の鐘を打つて居た。

山澤、花は人の目を誘ふ、水は人の心を引く。君も夜叉ヶ池を見に来たと云ふ。私が矢張り、池を見ようと、此里へ来た時、暮六つの鐘が鳴つたんだ。彌太兵衛爺に、鐘の所謂を聞きながら、夜があげたら池まで案内をさせる約束で、小屋へ泊めて貰つた處。

其の夜、丑滿の鐘を撞いて、鐘樓の高い段から下りると、爺は、此の縁前で打倒れた——急病だ。死ぬ苦惱をしながら、死切れないと云つて、悶える。——恚うした世間だ、既う以前から、村一統鐘の信心が消えて居る。……爺が死んだら、誰も鐘を鳴らすものがない。一度でも忘れると、掌をめくらさず、田地田畠、陸は水に成る、沼に成る、淵に成る。幾萬、何千の人の生命——其を思ふと死ぬるも死切れぬと、呻吟いて搔く。——蟲より細い聲だけれども、五十年の明暮を、一生懸命、然うした信仰で鐘樓を守り通した、骨と皮ばかりの爺が云ふのだ。……鐘の自から鳴る如く、僕の耳に響いた。……且は臨終の苦患の可哀さに、安心をさせようと、

——心配をするな親仁、鐘は俺が撞いて遣る、——とはつきり云ふと、世にも嬉しうに、ニヤニヤと笑つて、拜みながら死んだ。其の時の顔を今に忘れん。が、まさか、一生、こゝに鐘を撞いて終らうとは思はなかつた。丑滿は爺が済ました、明六つの鐘一度ばかり、代つて撞くぐらるにしか考へなかつた。が、まあ、爺が死ぬ、村のものを呼ぼうにも、此の通り隣家に遠い。三度の掟で其の外は、火にも水にも鐘を撞くことは成らないだらう。

學圓 其の鳴らして成らないと云ふは、何うした次第ぢやね？

晃 鐘は、高く、此處にあつて——其の影は、深く夜叉ヶ池の碧潭に映ると云ふ。……撞木を當

てて鳴る時は、凧にすら、そよりとも動かない、其の池の水が、さらりと波を立てると聞く。元來、龍神を驚かすために打鳴らすのであるから、三度のほかに騒がしては、禮を缺く事に當る。

學圓 其の道理ぢや、む。

晃 鐘も鳴らせん……處で、不知案内の村を駈廻つて人を集めた、——サア、彌太兵衛の始末は着いたが、誰も承合つて鐘を撞かうと言はない。第一、しかくであるからと、爺に聞いた傳説を、先祖の遺言のやうに嚴に言つて聞かせると、村のものは哄と笑ふ。……若いものは無理もない。老寄どもも老寄どもなり、寺の和尚までけろりとして、昔話なら、桃太郎の寶を取つて歸つた方が結構でござる、と言ふ。癪に障つた——勝手にしろ、と私も其處から、(と框を指し)草鞋を穿いて、すたくく此の谷を出て歸つたんだ。歸る時、鹿見村のはづれの土橋の袂に、榎の樹の下に立つて悄乎と見送つたのが、(と調子を低く)あの、婦人だ。其の日の、明六つの鐘さへ、學校通ひの小兒をはじめ、指しをして笑ふ上で、私が撞いた。此の様子では、最早や今日から、暮六つの鐘は鳴るまいな!……もしや、岩抜け、山津浪、然うでもない、大暴風雨で、村の滅びる事があつたら、打明けた處……他は構はん、……此の娘の生命もあるまい——待て、二三日、鐘堂を俺が守らう。其の内

には、と又四五日、半月、一月を経るうちに、早いものよ、足掛け三年。——君に逢ふまで、それさへ忘れた。……又、忘れるために、其の上、年に老朽ちて世を離れた、と自分でも斷念のため。……ばかりぢや無い、……雁、燕の行きかへり、軒なり、空なり、行交ふ目を、一寸は紛らす事もあらうと、晝間は白髪を被る。

學圓 (默然として顔を見る。)

晃 (言葉途絶える) 然う顔を見るな、恥入つた。

學圓 (少時、打案じ)すると、あの、……お百合さんぢや、其の人のために、こゝに隠れる氣に成つたと云ふのぢや。

晃 ……益々恥入る。

學圓 いや、恥づるには及ばん。が、何うぢや、細君を連れて東京へ歸るわけには行かんのかい。

晃 何も三ヶ國と言はん。越前一ヶ國とも言はん。われく二人が見棄てて去つて、此の村と、里と、麓に棲むものの生命を何うする。

學圓 萩原、(と呼びつ、寄り)で、君は其を信ずるか。

晃 信ずる、信ずるやうに成つた。萩原晃はいざ知らん、越前國三ヶ國ヶ嶽の麓、鹿見村琴彈谷の鐘樓守、百合の夫の二代の彌太兵衛は確に信じる。

學圓 (ひとり洋服の胡坐に手をおき) 何にも言はん。然う信ぜい。堅く信ぜい。奥方の人を離れた美しさを見るにつけても、天が此の村のために、お百合さんを造り置いて、鐘樓守を、ここに据ゑられたものかも知れん。君たち二人は二柱の村の神ぢや。就中、お百合さんは女神ぢやな。

百合 (行燈を手に黒髪美しく立出づる) 私、何うしたら可うございませう。

學圓 や、此は……

百合 貴客、今ほどは。

學圓 扱て、お初に……は、は、奥さん。

百合 まあ。……(と恥らふ。)

晃 これ、まあ……ではない、よく御挨拶申しな、兄とおなじ人だ。

百合 (黙つて手をつく。)

學圓 はい。いや、御挨拶は最う濟みました。貴女、噓は出ませなんだか。

晃 うつかり噓なんぞすると、蚊が飛出す。

百合 あれ、澤山おなぶんなさいまし。

晃 そんなに、お前、白粉を粧けて。

百合 あんな事ばかりおつしやる。(と優しく睨んで顔を隠す。)

學圓 何にしろ、お睦じい……は、は、勝手にお噂をしましたが、何は、お里方、親御、御兄弟は？

晃 山澤、何にもない孤兒なんだ。

鎮守の八幡の宮の神官の一人娘で、其の神官の父親さんも亡く成つた。叔父があつて、其が今、神官の代理をして居る。……此の前だが、叔父と云ふのは、了簡のよくない人だな。

學圓 それは。

晃 姪の此を、附けつ廻しつ爲たと云ふ大難ぶつです。

百合 眞個に、たよりのない身體でございます。何にも存じません、不束ものでございますけれど、貴客、何うぞ御ふびんをお懸けなすつて下さいまし。(しんみりと學圓に向つて三指して云ふ。)

學圓 (引き入れられて、思はず涙ぐむ。) 御殊勝ですな。他人のやうには思ひません。

晃 (同じく何となく胸せまる。涙を拂つて) さあ、親類と云ふお言葉なんだ。遠慮のない

處、何にも要らん。御吹聴の鳴焼で一杯つけな。此からゆつくり話すんだ。山澤、野菜は食は

したいぜ、そりや、甘いぞ。

學圓 奥方、お立ちなさるな。ト其處でぢやな、萩原、私は志した通り、此から夜を掛けて夜叉

ケ池を見に行く氣ぢや。種々不思議な話を聞いたら、尙ほ一層見たく成つた。御飯はお手料理

で御馳走に成らうが、お杯には及ばん、第一、知つてる通り、一滴も飲めやせん。

晃 成程、然うか、夜叉ケ池を見に来たんだ。……明日にしては、と云ふんだけれども、道は一

里餘り、が、上りが峻しい。此の暑さでは夜が可い。しかし、四五日は歸さんから、明日の晩

にしてくれないかい。

學圓 いや、學校がある。此でも學生の方ではないから勝手に休めん。第一、遊び過ぎて、既う

切詰めぢや。

晃 其は困つた、學校は？……先刻、落着く先は京都だと云つたやうだな

學圓 む、去年から。……みやづかへの情なさぢや。何しろ、急ぐ。

晃 分つた、では案内かたく一所に行く。

學圓 君も。

晃 ……直ぐに出掛けよう。

學圓 それだと、奥方に濟まんぞ。

晃 何を詰らない。

百合 否……(と云ひしがしをく) 貴方、直ぐにとおつしやつて、……お支度は、……

晃 土橋の煮染屋で竹の皮づゝみと遣らかす、其の方が早手廻だ。練の煮びたし、焼どうふ、可

からう、山澤。

學圓 結構ぢや。

晃 事が決れば早い可い。源左衛門は草履で可し、最明寺どのは、お草鞋、お草鞋。

學圓 やあ、おもしろい。奥さん、いづれ歸途には寄せて頂く。私は味噌汁が大好きです。小菜

を入れて食べさせて下さい。時に、歸途は何時に成らう。……

から鎌を貸しな、滅多に人の通はぬ處、路はあつても熊笹ぐらゐるは切らざあ成るまい。……早
くおし。

百合 はい、はい。

學圓 やあ、どぎく〜と鋭いな。(と鎌を見る。)

晃 月影に……(空へかざす) 尙ほ光るんだ。此でも鎌を研ぐことを覺えたぜ。——此方だ、此

方だ。(と先へ立つ。)

百合 お氣をつけ遊ばせよ。(とうるみ聲にて、送り出づる時、可愛き人形袖にあり。)

晃 何だい、こんなもの。(見返る。)

百合 太郎が一寸お見送り。(と袖でしめつ、) 小父ちゃんもお早くお歸りなさいまし、坊やが寂
しうございます。(と云ひながら、學圓の顔を見まもり、小家の内を指し、うつむいてほろりと
する。)

學圓 (庇ふ狀に手を舉げて、又涙ぐみ) 御道理ぢや、が、大丈夫、夢にも、そんな事が、貴女、

(と云つて晃に向きかへ) 私に逢うて、里心が出て、君が此なり歸るまいか、と云ふ御心配ぢや。

百合 (きまりわるげに、つと背向になる。)

晃 あ、其で先刻から……馬鹿、嬰兒だな。

學圓 何かい、一寸出懸に、キスなどせんでも可いかい。

晃 旦那方ぢやあるまいし、鐘撞彌太兵衛でがんすての。

と兩人連立ち行く。

百合 (熟と少時) まさかと思ふけれど、ねえ、坊や、大丈夫お歸んなさるわねえ。お、く〜目

目を瞑つて、頷いて、まあ、可愛い。(と頬摺りし) 坊やは、お乳をおあがりよ。母さんは一人

ではお夕飯も欲しくない。早く片附けてお留守をさせう。一人だを見て取ると、村の人が煩

いから、月は可し、灯を消して戸をしめて。——

と框にすつと兩戸を閉める。閉め果てると、戸の鍵がガチリと下りる。やがて、納戸の燈、

はつと消ゆ。

出る化ものの數々は、一ツ目、見越、河太郎、瀬に、海坊主、天守にをさかべ、化猫は赤手

拭、篠田に葛の葉、野干平、古狸の腹鼓、ポコボン、ポコボン、コリヤ、ボンポコボン、笛

に雨を呼び、酒買小僧、鐵漿着女の、けたく笑、里の男は、のつぺらぼう。

と唄——

與十、竹の小笠を仰向けに、鯉を一尾、嬉しさうな顔して見て、ニヤ〜と笑つて出づ。

與十 大い事をしたぞ。へい、雪さ豊年の兆だちゆう、早は魚の當りだんべい。大沼小沼が干た

故か、ちよんちよる水に、びちやくくと泳いだ處を、ちよろりと掬つた。……(鯉跳ねる)わい！ 銀の鱗だ。づんと重い。四貫目あるべい。村長様が、大圍爐裡の自在竹に掛つた瀧登りより、えつと大え。こりや己がで食はうより、村會議員の髯どのに賣るべいわさ。やれ、鯉の髯どのに身賣をしろぢや。値に成れ、値に成れ。(鯉跳ねる)ふあ、銀の鱗だ。金が光る——光るてえば、鱗てえば、こゝな、(と小屋を見ても)鐘撞先生が打つてしめた、神官様の嬢様さあ、お宮の住居にござつた時分は、背中に八枚鱗が生えた蛇體だと云つけえな。……そんではい、夜さり、夜ばひものが、寢床を覗くと、何時でもへい、白蛇の長いのが、嬢様のめぐり廻つて、のたくるちつて、現に、はい、目のくり球廻らかいて火を吹いた奴さへあつけえ。……

鐘撞先生には何事もねえと見えるだ。まんだ、丈夫に生きてござつて、執殺されもさつしやらねえ。見ろやい、取つても着けねえ處に、銀の鱗さ、ぴかくと月に光るちつて、汝がを、(と鯉をじろく)ばけものか蛇體と想うて、手を出さずば、うまい酒にもありつけぬ處だつちうものだ。——嬢様が手本だよ。はつてな、今時分、眞暗だ。舐殺されはしねえだかん、待ちろ。(と拔足で寄つて、小屋の戸の隙間を覗く。)

蟹五郎。朱顔、蓬なる赤毛頭、緋の衣したる山伏の扮装。山牛蒡の葉にて捲いたる煙草を、シヤと横銜へに、ぱつくと煙を噴きながら、兩腕を頭上に突張り、ト欽を極込み、踞んで

横這に、づかりくと歩行き寄つて、與十の潛見する向脛を、かつきと挟んで引く。與十 痛え。(と叫んで)わつ、(と反る時、鯉ぐるみ竹の小笠を夕顔の蔭に投ぐ。)ひやあ、藪澤の大蟹だ。人殺し！

と怪し飛んで遁ぐ。——蟹五郎すかりくと横に追ふ。鯉七。鯉の精。夕顔の蔭より、するくと顯る。黑白鱗の帷子、同じ鱗形の裁着、鱗の如きひらく足袋。件の竹の小笠に、面を蔽ひながら來り、はたと其の小笠を擲つ。顔白く、口のまはり、べたりと髯黒し。蟹、此を見て引返す。

鯉七 (ばくくと口を開けて、はつと溜息し) あゝ、人間が早の切なさ、今にして思當つた。某が水離れしたと同然と見える。……お、大蟹、今ほどはお助け嬉しい、難有かつたぞ。

蟹五郎 水心、魚心だ、其の禮に及ばうかい。又、だが、瀧登りもするものが、何ぢやとて、笠の臺に乗せられた。

鯉七 里へ出る近道してな、無理な流を抜けたと思へ。石に鱗が躓いて、膚捌の成らぬ處を、ばツさりと啖つた奴よ。

蟹五郎 此奴にか。(と落ちたる笠を挟んで壓へる。)

鯉七 鬼若丸以來と云ふ、難儀に逢はせた。百姓めが、汝。(と笠を踏む。)

笠 己ぢやねえ、己ぢやねえ。(と、聲ばかりして蔭にて叫ぶ。)

鯉七 はあ、いかさま汝の行爲でもあるまい。助けて遣らう——そりや行け。やい、稻が實つたら案山子に成れ!

と放す。しかけて、竹の小笠はたたくと煽つて遁げる。

は、は、飛ぶわく、南瓜畠へ潜つて候。

蟹五郎 人間の首が飛んだ状だな、氣味助、氣味助。かッくく。(と笑ひ)鯉七、此から何處へ行く。

鯉七 むう、些と里方へ用がある。處で瀧を下つて来た。何が、此の頃の早で、やれ雨が欲しい、それ水をくれろ、と百姓どもが、姫様のお住居、夜叉ヶ池のほとりへ五月蠅きほどに集つて來せる。それはまだ可い。が、何の禁厭か知れぬまで、鐵釘、鐵火箸、鑄刀や、破鍋の尻まで持込むわ。まだしもよ。お供物だと血迷つての、犬の首、猫の頭、目を剥き、髯を動かし、舌をへらく吐く奴を供へるわ。胡瓜ならば日野川の河童が嚙らう、以つての外な、汚穢うて汚穢うて、お腰元たちが掃除をするに手が懸つて迷惑だ。

處で、姫様のお乳母どの、湯尾峠の萬年姥が、某へ内意——降らぬ雨なら降るまでは降らぬ、向後汚いものなど撒散らすに於ては其の分に置かぬ——と里へ出て觸れい、とある。ためにの、

此の鰭を煩はす、厄介な人間どもよ。

蟹五郎 其の事かい、御苦勞、御苦勞。處で、大池の姫様には、なか／＼雨を下さる思召は當分ないかい。

鯉七 分らんの。早は何も、姫様御存じの事ではない。第一、其許なども知る通りよ。姫様は、それ、御縁者、白山の劍ヶ峰千蛇ヶ池の若旦那にあこがれて、戀し、戀しと、其ばかり思詰めてましますもの、人間の早なんぞ構つて居る暇があるものかッてい。

蟹五郎 神通廣大——俺をはじめ考へるぞ。然まで思惱んでおいでなさらず、兩袖で翩然と飛んで、疾く劍ヶ峰へおいでなさるが可いではないか。

鯉七 其處だの、姫様が座をお移し遊ばすと、それ、立處に可恐しい大津浪が起つて、此の村里は、人も、馬も、水の底へ沈んで了ふ……

蟹五郎 何が、何が、第一俺が住居も廣う成る……村が泥沼に成るを、何が遠慮だ。勸めろ、勸めろ。

鯉七 忘れたか、鐘が此處にある。……御先祖以來、人間との堅い約束、夜晝三度、打つ鐘を、彼奴等が忘れぬ中は、村は滅びぬ天地の誓盟。姫様にも隨意に成らぬ。然ればこそ、御懷、其の御ふびんさ、おいとしさを忘れたの。

蟹五郎 南無三寶、堂の下で誓を忘れて、鐘の影を踏まうとした。が、山も田圃も晃々とした月

夜だ。まだくしめつた灰も降らぬと成ると、俺も澤を出て、山の池、御殿の長屋へ行かすばなるまい。同道を頼むぞ、鯉。

鯉七 む、其の儀は、ぱくりと合點んだ。かはりにはの、道が寂しい……里へは、きこう同道せい。

蟹五郎 歸途はお池へ伴侶だ。

鯉七 月の暎を、唄ふて行かうよ。

蟹五郎 何と唄ふ？

鯉七 山を川にせう——と唄はうよ。

蟹五郎 面白い。

と同音に、鯉はふらくくと袖を動かし、蟹は、ぱつくと煙を吹いて、——山を川にせう、山を川にせう——と同音に唄ひ行く。行掛けて淀み、行途を望む。

鯉七 待て、見馴れぬものが、何やら田の畝を傳うて来る。

蟹五郎 かつく、怪しいものだ。小蔭れて様子を見んかい。

兩個、姿を隠す。

百合 (人形を抱き、媚かき風情にて戸を開き戸外に出づ。) 夜の長い事、長い事……何の夏が明易からう。坊やも寝られないねえ、——お月様幾つ、お十三、七つ——今も誰やら唄うて通

つたのをお聞きかい、——山を川にしよ——あ、此の頃では村の人が、山を川にもしたからう、お氣の毒だわねえ。……まあ、良い月夜、峰の草も見えるやうな。晃さん、お客様の影響も、あの、松のあたりに見えようも知れないから、鐘堂へ上りませうね。……ひよつとかして、袖でも觸つて鳴ると悪いね、田圃の廣場へ出て見ようよ。(と小屋のうらに廻つて入る。)

鯉入。花道より、濃い鼠すかしの頭巾、一面に黒し。白き二根の髯、鼻下より左右にわかれて長く裾まで垂る。墨染の法衣を絡ひ、鰭の形したる鼠の足袋。一本の蘆を杖つき、片手に緋總結びたる、美しき文箱を捧げて、ふらくと出で来る。

鯉入 遙々と参つた。……以つての外早魅なれば、思つたより道中難儀ぢや。(と遙に仰いで) はあ、争はれぬ、峰の空に水氣が立つ。嬉しや、……夜叉ヶ池は、彼處に近い。(と辿り寄る。)

鯉、蟹、前途に立顯る。

鯉七 誰だ。此へ来たは何ものだ。

蟹五郎 お山の池の一の關、藪澤の關守が控へた。名のつて通れ。

鯉入 (杖を袖にまき熟と視て) 扱は縁のない衆生でないの。……此は、北陸道無雙の靈山、白

山、劍ヶ峰千蛇ヶ池の御公達より、當國、三國ヶ嶽夜又ヶ池の姫君へ、文づかひに參るものぢや。

鯉七 お、聞及んだ黒和尚。

蟹五郎 鯉入は御坊かい。

鯉入 此は、いづれも姫君のお身内な。夜又ヶ池の御眷屬か。よい所で出會ひました、案内を頼みませう。

蟹五郎 お使、御苦勞です。

鯉七 些と申つかつた事があつて、里へ參る路ではあれども、若君のお使、何は措いてもお供せう。姫様、お喜びの顔が目に見える。われらもお庇で面目を施します、さあ、御坊。

蟹五郎 さあ、御坊。

鯉入 (ふと、くなくと成つて得進まず。) しばらく。先づ、しばらく。……

鯉七 御坊、お草臥れなら、手を取りませう。

蟹五郎 何と腰を押さうかい。

鯉入 いや、疲れはしませぬ。尾緒はのらくと跳ねるなれども、こゝに、ふと、世にも氣懸りが出来たぢやまで。

鯉七 氣懸りとは？ 御坊。

鯉入 此處まで辿つて、いざ、お池へ參ると思へば、急に此の文箱が、身にこたへて、づんと重う成つた。其の事ぢや。

鯉七 戀の重荷と言ひますの。お心入れの御狀なれば、池に近し、御雙方お氣が通つて、自然と文箱に籠りましたか。

蟹五郎 又かい。姫様から、御坊へお引出ものなさる。……あの、黄金白銀、米、粟の湧こぼれる、石臼の重量が響きますかい。

鯉入 (悄然として) いや、私が身に應へた處は、こりや蟲が知らすと見えました。御褒美に遣はさる、石臼なれば可けれども——此の坊主を輪切りにして、スツボン煮を賞翫あれ、姫、お晝寝の御目覺しに——と記してあらうも計られぬ。わあ、可恐しや。(とわなくと蘆の杖とともにふるひ出す。)

鯉七 何で又、其のやうな飛んだ事を？ 御坊。……

鯉入 いや、急に文箱の重いつけて、ふと思ひ出した私が身の罪科がござる。扱て、言ひ兼ねましたが打開けて恥を申さう。(と頸をすくめて、頭を撫で)……近頃、此方衆の前ながら、館、劍ヶ峰千蛇ヶ池へ——熊に乗つて、黒髪を洗ひに來た山女の年増がござつた。裸身の色の

白さに、つい、とろ／＼と成つて、面目なや、ぬらり、くらりと鰭を滑らかいてまつはりましたが、フトお目觸りと成つて、われら若君、以つての外御機嫌ぢや。——處を此の度の文づかひ、泥に潜つた閉門中、唯おほせつけの嬉しさに、うか／＼と出て参つたが、心付けば、早や鰭の下がくすぼつたい。(と又震ふ。)

蟹五郎 かッ、かッ、かッ、(と笑ひ)御坊、おまめです。あやかりたい。

鯉入 笑はれますか、情ない。生命とまでは無うても、鰭、尾を放て、髯を抜け、とほどには、おふみに遊ばされたに相違はござるまい。……此は一期ぢや、何とせう。(と寂しく泣く。)

鯉、蟹、此を見て嘸き、頷く。

鯉七 いや、御坊、無い事とも言はれませぬ。昔も近江街道を通る馬士が、橋の上に立つた見も知らぬ婦から、十里前の一里塚の松の下の婦へ、と手紙を一通ことづかりし事あり。途中氣懸りに成つて、密と其の封じ目を切つて見たれば、——妹御へ、一、此の馬士の腸一組参らせ候——とした、められた——何も知らずに渡さうものなら、腹を割かる、處であつたの。

鯉入 はあ、(と噎と尻餅つく。)

蟹五郎 お笑止だ。かッ／＼／＼。

鯉七 幸、五郎が鉞を持ちます……密と封を切つて、御覽が可からう。

鯉入 やあ、何と、……其を頼みたいばかりに恥を曝した世迷言ぢや。……嬉しや、大目に見て下さるかなう。

蟹五郎 尤も、尤も。

鯉七 又……(と聲を密めて)戀し床のお文なれば、そりや、われ／＼どもが尙ほ見たい。

鯉入 (わな、きながら、文箱を押頂き、紐を解く。)

鯉、蟹と寄る。蓋を放つて齊しく見る。

鯉入 やあ!

鯉七 え、／＼。

蟹五郎 やあ／＼／＼!

鯉入 文箱の中は水ばかりよ。

と云ふ時、さつと、清き水流れ溢る。

鯉七 あれ／＼／＼、姫様が。

はつと鯉入とともに泳ぐ形に腹ばひに成る。蟹は跪いて手を支ふ。——迫上にて——
夜叉ヶ池の白雪姫。雪なす羅、水色の地に紅の焰を染めたる襲衣、黒漆に銀泥、鱗の帯、下締なし、裳をすらりと、黒髪長く、丈に餘る。銀の靴をはき、帯腰に玉の如く光輝く鐵杖を

はさみ持てり。両手にひろげし玉章を颯と繰落して、地招に取る。

右に、湯尾峠の萬年姥。針の如き白髪、朽葉色の帷子、赤前垂。

左に、腰元、木の芽峠の奥山椿、萌黄の紋付、文金の高髻に緋の乙女椿の花を挿す。両方に

手を支いて附添ふ。

十五夜の月出づ。

白雪 ふみを読むのに、月の明は、もどかしいな。

姥 御前様、お身体の光りで御覽するが可うござります。

白雪 (下襲を引いて、袖口の炎を翳し、やがて讀果てて恍惚と成る。)

椿 姫様。

姥 もし、御前様。

白雪 可懐しい、優しい、嬉しい、お床しい音信を聞いた。……姥、私は参るよ。

姥 たま〜麓へお歩行が。

椿 最うお歸り遊ばしますか。

白雪 何處へ?……(と聞返す。)

姥 お住居へ。

白雪 何?

姥 夜叉ケ池へでござりませう。

白雪 あれ、お前は何を言ふ……私の行くのは劍ヶ峰だよ。

一同 劍ヶ峰へ、とおつしやりますと?

白雪 聞かすと大事なものを——千蛇ヶ池とは知れた事——此おふみの許へさ。(と巻戻し懐中に納めて抱く。)

姥 (居直り) 又……我儘を仰せられます。お前様、こゝに鐘がござります。

白雪 む、(と毗をあげて、鐘樓を屹と見る。)

姥 お忘れはなさりますまい。山ながら、川ながら、御前様が、お座をお移しなさりますれば、

幾萬、何千の生類の生命を絶たねば成りませぬ。劍ヶ峰千蛇ヶ池の、あの御方様とても同じ事、

此へお運びとなりますと、白山谷は湖に成りますゆゑ、其のために彼方からも御越の儀は叶ひ

ませぬ。——姥はじめ胸を痛めます。……おいとしい事なれども、是非ない事にござります。

白雪 そんな、理窟を云つて……姥、お前は人間の味方かい。

姥 へ、(嘲笑ひ) 尾のない猿ども、誰がかばひだてたしませう。……憎ければとて、淺ましければとて、氣障なればとて、たとひ仇敵なればと申して、約束はかへられませぬ、誓を破つ

ては相成りませぬ。

白雪 誓盟は、誰がしたえ。

姥 御先祖代々、近くは、兩、親御様まで、第一お前様に御遺言ではございませぬか。

白雪 知つて居ます。(とつんとひざる。)

姥 もじ、お前様、其の淺ましい人間でさへ、約束を堅く守つて、五百年、七百年、盟約を忘れぬではござりませぬか。盟約を忘れませぬばこそ、朝六つ暮六つ丑満つ、と三度の鐘を絶しま

せぬ。此の鐘の鳴りますうちは、村里を水の底には沈められぬのでござります。

白雪 え、怨めしい……此の鐘さへなかつたら、(と熟と視て、すらりと立直り)衆に、此處へ來いとお言ひ。

椿 (立つて一方を呼ぶ。) 召します。姫様が召しますよ。

鯉七 (立上りて一方を) やあ、いつれも早く。(と呼ぶ。)

眷屬ばらりと左右に居流る。一同得ものを持てり。扮装おもひく、鎧を着たるもあり、鬮を頭に頂くもあり、百鬼夜行の體なるべし。

虎杖 虎杖入道。

鯖江 鯖江ノ太郎。

鯖波 鯖波ノ次郎。

此の兩個、「兄弟のもの。」と同音に名告る。

塚 十三塚の骨寄鬼。

蟹五郎 藪澤のお關守は既に先刻より。

椿 其のほか、夥多の道陸神たち、こたますだま、魍魎、魍魎。

影法師、おなじ姿のもの夥多あり。目も鼻もなく、あたまから唯灰色の布を被る。

影法師 影法師も交りまして。

と此の名のる時、ちらりと遠近に陰火燃ゆ。此よりして明滅す。

鯉七 身内の面々、一同参り合せました。

鯉入 憚りながら法師も此に……

白雪 お、遠い路を、大儀。すぐお返事を上げませうね、其のために皆を呼びましたよ。

姥 や、彼方へお返事につきまして、いつれもを召しました?——仰せつけられまする儀は?

白雪 姥、何う思つても私は行く。劍ヶ峰へ行かねばならぬ。鐘さへなくば盟約もあるまい……

皆が、あの鐘、取つて落して、微塵になるまで砕いておしよ。

姥 え、く、仰せなればと云うて、いつれも必ずお動きあるな。(眼を光らし、姫を瞻めて)まだ

其のやうなわやくをおつしやる。……身うちの衆をお召出し、お言葉がござりましたは、わやくが、わやくに成りませぬ。天の神々、きこえも可恐ぢや。……數の人間の生命を斷つ事、屹とおたしなみなさりませぬ。

白雪 人の生命の何う成らうと、其を私が知る事か！……戀には我身の生命も要らぬ。……姥、堪忍して行かしてくれ。

姥 あゝ、お最惜い。が、成りますまい。……最う多年御辛抱なさりますと、三十年、五十年とは申しますまい。今の世は佛の末法、聖の澆季、盟誓も約束も最早や忘れて居ります。漸々と信仰を繋ぎますのも、あの鐘を、鳥の啄いた蔓葛で釣しましたやうなもの、鎖も絆も切れますのは、まのあたりでござります。其までお堪へなさりまし。

白雪 あんな氣の長い事ばかり。あこがれ慕ふ心には、冥土の關を据ゑたとて、夜あくるのも待たれうか。可し、可し、衆が肯かすば私が自分で。(と氣が入る。)

椿 あれ、お姫様。

姥 此は何となされます……取棄てて大事な鐘なら、お前様のお手は待たぬ……身内に仰せまでもない。何、唐銅の八千貫、恸う瘦せさらばへた姥が腕でも、指で挟んで棄てませうが、重いは義理でござりまするもの。

白雪 義理や掟は、人間の勝手づく、我と我が身をいましめの繩よ。……鬼、畜生、夜叉、惡鬼、毒蛇と言はるゝ私が身に、袖とて、褌とて、戀路を塞いで、遮る雲の一重もない！……先祖は先祖よ、親は親、お約束なり、盟誓なり、それは都合で遊ばした。人間とても年が経てば、ないがしろにする約束を、一呼吸早く私が破るに、何に憚る事がある！ あゝ、戀しい人のふみを抱いて、私は心も惱亂した、姥、許して！

姥 成程、お氣が亂れましたな。朝六つ暮六つ唯だ一度、今宵此の丑満一つも、人間が怠れば、其の時こそは瞬く間も待ちませぬ。お前様を、此の姥がおぶひ申して、お靴に雲もつけますまい。人は死なうと、溺れようと、峰は崩れよ、麓は埋れよ、劍ヶ峰まで、唯一飛び。……此の鐘を撞く間に、盟誓をお破り遊ばすと、諸神、諸佛が即座のお祟り、それを何となされます！

鯉七 當國には、板取、歸、九頭龍の流を合せて、日野川の大河。

蟹五郎 美濃の國には、名だたる揖斐川。

姥 二個の川の御支配遊ばす。

椿 百萬石のお姫様。

姥 我まゝは……

一同 相成りませぬ。

姥 お身體。

一同 大事にござります。

白雪 え、煩いな、お前たち。義理も仁義も心得て、長生したくば勝手におし。……生命のために戀は棄てない。お退き、お退き。

一同、入亂れて、遮り留むるを、振拂ひ、搔い潜つて、果は眞中に取籠められる。

お退きといふに、え……

とじて、鐵杖を抜けば、白銀の色、月に輝き、一同は、はッと退く。姫、するくと寄り、颯と石段を駈上り、柱に縋つて屹と鐘を――

諸神、諸佛は知らぬ事、天の御罰を蒙つても、白雪の身よ、朝日影に、情の水に溶くるは嬉しい。五體は粉に碎けようと、八裂にされようと、戀しい人を血に染めて、燃えあこがる、魂は、幽な螢の光と成つても、劍ヶ峰へ飛ばいで置かうか。

と晃然とかさず鐵杖輝く……時に、月夜を遙に、唄の聲す。

——ねんねんよ、おころりよ、ねんねの守は何處へいた、山を越えて里へ行た、里の土産に何貰うた、でんく太鼓に笙の笛——

白雪 (じつと聞いて、聞惚れて、火焰の袂たよくと成る。やがて石段の下を呼んで) 姥、姥、

あの、聲は？……

姥 社の百合でござります。

白雪 お、美しいお百合さんか、何をして居るのだらうね。

姥 戀人の晁の留守に、人形を抱きまして、心遣りに、子守唄をうたひます。

白雪 戀しい人と分れて居る時、うたを唄へば紛れるものかえ。

姥 おほせの通りでござります。

一同 姫様、遊ばして御覽じませぬか。

白雪 思ひせまつて、つい忘れた。……私が此の村を沈めたら、美しい人の生命もあるまい。鐘を撞けば仇だけども、(と石段を靜に下りつゝ) 此家の二人は、嫉しいが、羨しい。姥、おとなしうして、あやからうな。

姥 (はらくと落涙して) お嬉しう存じます。

白雪 (椿に) お前も唄ふかい。

椿 はい、いろくのを存じて居ります。

鯉七 いや、お腰元衆、いろく知つたは結構だが、近ごろはやる——池の鯉よ、緋鯉よ、早く出て麩を食へ——なぞと、馬鹿にしたやうなのはお唄ひなさるな、失禮千萬、御機嫌を損じよ

う。

椿 まあ……お前さんが、身勝手な。

一同 (どつと笑ふ。)

白雪 人形抱いて、私も唄はう……剣ヶ峰のおつかひ。

鯨入 はあ、はあ、はッ。

白雪 お返事を上げよう……一所に——椿や、文箱をお預り。——衆も御苦勞であつた。

一同敬ふ。 || でんく太鼓に笙の笛、起上り小法師に風車 || と唄ふを聞きつゝ、左右に分れて、おひくく一同入る。陰火全く消ゆ。

月あかりのみ。遠く犬吠え、近く五位鶯啼く。

お百合、いきを切つて、襦もはらくと遁げ歸り、小家の内に駈入り、隠る。あとより、村長畑上嘉傳次、村の有志権藤管八、小學校教員齋田初雄、村のものともに追掛け出づ。一方より、神官代理鹿見宅膳、小力士、小鳥風呂助と、前後に村のもの五人ばかり、烏帽子、素袍、雜式、仕丁の扮装にて、一頭の眞黒き大牛を牽るて出づ。牛の手綱は、小力士これを取る。

村一 内へ隠れただ、内へ隠れただ。

村二 眞暗だあ。

初雄 灯を消したつて夏の蟲だに。

管八 踏込んで引摺出せ。

村のもの四五人、ばらくと跳込む。内に、あれくと言ふ聲。雨戸ばらくとはづる。

眞中に屹と成り——左右を支へて、

百合 何をおした、人の内へ。

管八 人の内も我が内もあるものかい。鹿見一郡六ヶ村。

初雄 焼土に成らう、野原に焦げようと云ふ場合であるです。

宅膳 (すつと出で) こりや、お百合、見苦しい、何をざわつく。唯今も、途中で言聞かした通りぢや。汝に白羽の矢が立つたで、否應はないわ。六ヶ村の水切れぢや。米ならば五萬石、八

千人のために、雨乞の犠牲に成りませう！ 小兒のうちから知つても居らうが、絶體絶命の早

の時には、村第一の美女を取つて裸體に剥き……

百合 え、。(と震へる。)

宅膳 黒牛の背に、鞍置かず、荒繩に縛める。や、尤も神妙に覺悟して乗つて行けば縛るには及

ばんでさ。……すなはち、草を分けて山の腹に引上せ、夜叉ヶ池の龍神に、此の犠牲を奉るぢ

や。が、生命は取らぬ。然るかはり、背に裸身の美女を乗せたまゝ、池のほとりで牛を屠つて、角ある頭と、尾を添へて、これを供へる。……肉は取つて、村一同冷酒を飲んで啖へば、一天忽ち墨を流して、三日の雨が降灌ぐ。田も畠も蘇生るとあるわい。昔から一度も其の験のない事はない。お百合、それだけの事ぢや。我慢して、村長閣下の前につけても御奉公申上げい。さあ、立たう、立ちませう。

百合 叔父さん、何にも申しません、何うぞ、あの、晃さん、旦那様のお歸りまでお待ちなすつて下さいまし。もし、皆さん、堪忍して下さいまし。……手を合せて拜みます。そ、そんな事が、まあ、私に……

管八 何だとう？

初雄 貴女、お百合さん、何ですか。

百合 叔父さん、後生でございます……晃さんの歸りますまで。

宅膳 又しても旦那様ぢや。晃、晃と呆れた奴めが。これ、潮の満干、月の數……今日の今夜の丑満は過ぎぬ。立ちませう、立ちませう。

管八 言ふことを肯かんと縛り上げるぞ。

嘉傳次 村、郡のためぢや、是非がない。これ、はい、氣の毒なものぢやわい。

管八 お神官、こりやいかんでえ？

宅膳 引立てて可うござる。

管八 来い、それ。

と村のもの取込む。百合逃げ迷ふ。

風呂助 埒あかんやう。私にまかせたが可うごんす。

とのさばり掛り、手もなく抱すくめて掴み行く。仕丁手傳ひ、牛の背に仰げざまに置く。

百合 あ、れ。(と悶ゆる。)

胴にまはし、ぐるぐると繩を捲く。お百合背を捻ぢて面を伏す、黒髪颯と亂れて長く牛の鱗爪に落つ。

嘉傳次 宅膳どん、こりや、きものを着て居て可いかい。

宅膳 はあ、いづれ、社の森へ参つて、式の如く本支度に及びまするて。社務所には、既に、近頃此のあたりの大地主に成られましたる代議士閣下をはじめ、お歴々衆、村民一同の事をお憂慮なされて、雨乞の模様を御見物にお揃ひでござりますてな。

嘉傳次 其の事ぢやつけね。

初雄 皆、急ぐです。

管八 諸君努力せよかね、は、は、は。

一同、どや／＼と行きかゝる。

晃 (衝と來り、前途に立つて、屹と見るより、仕丁を左右へ拂ひのけ、はた、と睨んで、牛の鼻頭を取つて向け、手繩を、ぐい、と緊めて、づか／＼我家の前。腰なる鎌を抜くや否や、無言のまゝ、お百合のいましめの繩を弗ツと切る。)

百合 (一目見て) お、晃さん、(とろげ落ち、晃のうしろに身をかくして、帯の腰に取継り) 旦那様、いゝ處へ。貴下。何うして、まあ、よく、まあ、早う歸つて下さいました、ねえ。

晃 (百合を背後に庇ひ、利鎌を逆手に、大勢を睨めつけながら、落着いたる聲にて) あゝ、夜叉ヶ池へ——山路、三のばかり上つた處で、峰裏幽に、遠く池ある處と思ふあたりで、小兒をあやす、守唄の聲が聞えた。……唄の聲が此の月に、白玉の露を繋いで、蓬の草も綾を織つて、目に蒼く映つたと思へ。……伴侶が非常に感に打たれた。——山澤には三歳に成る小兒がある。……里心が出て堪へられん。月の夜路に深山路かけて、知らない他國に徜徉ふことは又、來る年の首途にしよう。歸り風が颯と吹く、と身體も寒く成つたと云ふ。私もしきりに胸騒ぎがする。すぐに引返して歸つたんだよ。(と穩に、百合に向つて言ひ果てると、すツと立つて、瓢を逆に、月を仰いで、こツと飲む。)

百合、のび上つて、晃が紐を押へ頸に掛けたる小笠を取り、瓢を引く。晃はなすを、受け取つて框におく。すぐに、鎌を取らうとする。晃、手を振つて放さず、お百合、しかと其の晃の鎌を持つ手に継り居る。

晃 歸れ、君たちア何をして居る。

初雄 更めて斷るですがね、君、お氣の毒だけれど、最う、村を立去つてくれ給へ。

晃 俺を此の村に置かんと云ふのか。

初雄 然りです。——御承知でもあるでせう、又御承知がなければ、恐らく白癡と言はんけりや成らんですが、此の早です、早魘です。……一滴の雨と雖も、千金、寧ろ萬金の場合にですな。君が迷信さるゝ處の其の鐘はです。一度でも鳴らさない時は即ち其の、村が湖に成ると云ふです。湖に成る……結構ですな。望む處である、です、から、して、からに、其の即ちです。今夜からしてお撞きなさない事にしたのです。鐘を撞かん事に成つて見る日に成つて見ると、いたしてから、其の、鐘を撞くための君はですな、名は權助と云ふか何うかは分らんですが、えゝん!

村二三 ひやく。(と云ふ。)

村四五 撞木野郎、丸太棒。(と怒鳴る。)

初雄 えへん、君は此の村に於て、肥料の糟にも成らない、更に、敢て、而して其の、聊も用のない人です。故にです、故にですな、我々一統が、鐘を、お撞きに成るのを、お断りを、しますと同時に、村を、お立ち去りの事を宣告するのであるです。

村二三 然うだ、然うだとも。

晃 望む處だ。……鐘を守るとも守るまいとも、勝手にしろと言はる、から、俺には約束がある……義に依て守つて居たんだ。鳴らすなと言ふに、誰がすき好んで鐘を撞くか。勿論、即時に此處を去る。

村四五 出て行け、出て行け。(と異口同音)

晃 お百合行かう。——(其のいそぐ身繕ひするを見て)支度が要るか、跣足で来い。茨の路は負つて通る。(と手を引く。)

お百合其の袖に庇はれて、大勢の前を行く。——忍んで様子を見たる、學圓、此の時密と其の姿を顯す。

管八 (悪く沈んだ聲して) おい、おい待て。

晃 (構はず、つかくと行く。)

管八 待て、こら!

晃 何だ。(と衝と返す。)

管八 汝、村のものは置いて行け。

晃 塵ひとつ葉も持つちや行かんよ。

管八 其の婦は村のものだ。一所に連れて行く事は出来ないのだ。

晃 いや、此の百合は俺の家内だ。

嘉傳次 黙りなさい。村のものぢやわい。

晃 何處のものでも差支へん、百合は来たいから一所に来る……留りたければ留るんだ。それ見ろ、萩原に縋つて離れやせん。(微笑して)置いて行けば百合は死なう……人は、心のまゝに生きねばならない。お前たちどもに分るものか。さあ、行かう。

宅膳 (のしと進み) これ、若いもの、無分別は爲に成らんど。……私が姪は、たゞ此の村のものばかりでない。一郡六ヶ村、八千の人の生命ぢや、雨乞の犠牲にしてな。それぢやに、……其の犠牲の女を連れて行くのは、八千の人の生命を、お主が奪取つて行くも同然。百合を置いて行かん事には、此處は一足も通されんわ。百合は八千の人の生命ぢやが。……さあ、何うぢやい。

學圓 しばらく、(聲を掛け、お百合を中に晃と立並ぶ。) 其の返答は、萩原からは爲にくからう。

代つて私が言ふ。——如何にも、お百合さんは村の生命ぢや。それなればこそ、華胄の公子、

三男ではあるが、伯爵の萩原が、たゞ、一人の美しさのために、一代鐘を守るではないか——
既に、此の人を手籠めにして、牛の背に繩目の恥辱を與へた諸君に、論は無益と思ふけれども、
衆人環り視る中に於て、淑女の衣を奪うて、月夜を引廻すに到つては、主、親を殺した五逆罪
の極悪人を罪するにも、洋の東西にまだ嘗てためしを聞かんぞ！

そりや或は雨も降らう、黒雲も湧き起らうが、其は、慘憺たる黒牛の背の犠牲を見るに忍びな
いで、天道が泣かるゝのぢや。月が面を蔽ふのぢや。天を泣かせ、光を隠して、それで諸君は
活きらるゝか。稻は生きても人は餓ゑる、水は湧いても人は渴ゑる。……無法な事を仕出して、
諸君が萩原夫婦を追うて、鐘を撞く約束を怠つて、萬一、地が泥海に成つたら何うする！ 六
ヶ村八千と言はるゝか、其の多くの生命は、諸君が自ら失ふのぢや。同じ迷信と言ふなら言へ。
夫婦仲睦じく、一生埋木となるまでも、鐘樓を守るに於ては、自分も心を傷けず、何等世間に
害がない。

管八 黙れ、煩い。汝が勝手な事を言ふな。

初雄 一體君は何ものですか。

學圓 私か、私は萩原の親友ぢや。

宅膳 藪から坊主が何を吐す。

學圓 如何にも坊主ぢや、本願寺派の坊主で、そして、文學士、京都大學の教授ぢや。山澤學圓
と云ふものです。名告るのも恥入りますが、此の國は眞宗門徒信仰の淵源地ぢや。諸君のなか
には同じ宗門のよしみで、同情を下さる方もあらうかと思つて云ひます。(教員に)君は學校の
先生か、同一教育家ぢや。他人でない、扱つてくれ給へ。(神官に)貴方も教への道は御親類。
(村長に)村長さんの聲名にもお縋り申す。……(力士に)な、天下の力士は俠客ぢや、男立と
見受けました。……何分願ひます、雨乞の犠牲はお許しを頼む。

此がために一同少時ためらふ。……代議士穴隈鑛藏、葉巻をくゆらしながら、悠々と出づ。
鑛藏 其奴等騙賊ぢや。又、騙賊でなうても、華族が何だ、學者が何だ、糧を何うする！……命
を何うする？……萬事俺が引受けた。遣れ、汝等、裸にしようが、骨を抜かうが、女郎一人と、
八千の民、誰か鼎の輕重を論ぜんやぢや。雨乞を斷行せい。

力士眞前に、一同ばらりと立懸る。

學圓 私を縛れ、(と上衣を脱ぎ棄て)恚ほど云うても肯入れないなら止むを得ん、私を縛れ、牛
にのせい。

晃 (からりと鎌を棄て) いや、身代りなら俺を縛れ。さあ、八裂にしろ、俺は辭せん。——牛に

乗せて夜叉ヶ池に連れて行け。犠牲によつて、降らせる雨なら、俺が龍神に談判して遣る。

百合 あれ、晁さん、お客様、私が行きます、私を遣つて下さいまし。

晁 成らん、生命に掛けても女房は賣らん、龍神が何だ、八千人が何うしたと！ 神にも佛にも

戀は賣らん。お前が得心で、納得して、好んですると云つても留めるんだ。

鑛藏 (ふはくと軽く詰め寄り、コックと杖を叩いて) 血迷ふな！ たはけも可い加減にし

ろ、女も女だ。湯屋へは何うして入る？……うむ、馬鹿が！ (と高笑ひして) 君たち、おい、

苟も國のためには、妻子を刺殺して、戦争に出ると云ふが、男兒たるものの本分ぢや。且つ

我が國の精神ぢや、即ち武士道ぢや。人を救ひ、村を救ふは、國家の爲に盡すのぢや。我が國

のために盡すのぢや。國のために盡すのに、一晚媽々を牛にのせるのが、然ほどまで情ないか。

洩垂しが、俺は料簡が廣いから可いが、氣の早いものは國賊だと思ふぞ、汝。俺などは、鑛藏

は、村はもとより此處に居るた、此の人民蒼生のためと云ふにも、何時でも生命を棄てるぞ。

時に村人は敬禮し、村長は頤を撫で、有志は得意を表す。

晁 死ね！ (と云ふまゝ、落したる利鎌を取つてきつと突つく。)

鑛藏 わあ。(と思はず退る。)

晁 死ね、死ね、死ね、民のために汝死ね。見事に死んだら、俺も死んで、其から百合を渡して

遣る。死ね、死ないか。

とどり、と寄るたび、鑛藏ひよこくと退る。お百合、晁の手に取絶ると、絶られた手を震

はしながら、

然、然らずんば決闘せい。

一同其の詰寄るを、わつわと遮り留む。

傍へ寄るな、口が臭いや、こいつ等も！ 汝等は、其の成金に買はれたな。これ、昔も同じ事

があつた。白雪、白雪と云ふ、此の里の處女だ。權勢と迫害で、可厭がるものを無理に捉へて、

裸體を牛に縛めて、夜叉ヶ池へ追上げた。……處女は、口惜しさ、恥かしさ、無念さに、生き

ては里へ歸るまい。其方も、……其方も……追つては屠らるゝ。同じ生命を、我に與へよ、と

鼻頭を撫でて牛に言ひ合め、終夜芝を刈りためたを、其の牛の背に山に積んで、石を合せて火

を放つと、鞭を當てるまでもない。白い手を挙げ、衝とさして、麓の里を教ふるや否や、牛は

雷の如く舞下つて、片端から村を焼いた。……麓にはつと塵のやうな赤い焰が立つのを見て、

笑を含んで、白雪は夜叉ヶ池に身を沈めたと云ふのを聞かぬか。忘れたか。汝等。おれたちに

指でも指して見ろ、雨は降らいで、鹿見村は焰に成らう。不埒な奴等だ。

鑛藏 世迷言を饒舌るな二才。村は今既に早の焰に焼けて居る。其がために雨乞するのぢや。や

鑛藏 世迷言を饒舌るな二才。村は今既に早の焰に焼けて居る。其がために雨乞するのぢや。や

あ衆、手ぬるい、遣れ遣れ。(いづれも猶豫するを見て) 埒明かな、傳吉ども来い。(と喚く。)

博徒傳吉、威の長ドスをひらめかし、乾兒、得ものを振つて出づ。

傳吉 疊んで了へ、疊んで了へ。

乾兒 合點だ。

晃 山澤、危いぞ。

とお百合を抱くやうにして三人鐘樓に駈上る。學圓は奥に、上り口に晃、お百合、と互に楯に成らんと争ふ。やがて押退けて、晃、すつくと立ち、鎌を翳す。博徒、衆ともに下より取

巻く。お百合、振上げたる晃の手に縋る。

一同 遣れ、遣つたへ、遣つたへ。

學圓 言語道斷、いまだ嘗て、恚る、頑冥暴虐の民を知らん! 天に、——天に銀河白し、瀧と

成つて、落ちて来い。合掌す。

晃 大事な身體だ、山澤は遁げい、遁げい。

と呼ばはりながら、眞前に石段を上れる傳吉と、二打三打、稻妻の如く、チャリ、と合す。

傳吉退く。時に礫をなげうつものあり。

晃 (額に傷き血を厭へて) あッ。(と鎌を取落す。)

百合 (サククに其鎌を拾ひ) 皆さん、私が死にます、言分はござんすまい。(と云ふより早く胸をさきをかッしと切る。)

晃 了つた!(と鎌を振取る。)

百合 晃さん——御無事で——晃さん。(とがつくり落入る。)

一同色沮みて茫然たり。

晃 一人は遣らん! 茨の道は負つて通る。冥土で待てよ。(と立直る。お百合を抱ける、學圓と面を見合せ) 何時だ。と極めて冷静に聞く。

學圓 (沈着に時計を透かして) 二時三分。

晃 む、夜毎に見れば星でも了る……丁ど丑満……然うだらう。(と昂然として鐘を凝視し) 山澤、僕は此の鐘を搦くまいと思ふ。何うだ。

學圓 (沈思の後) うむ、打つな、お百合さんのために、打つな。

晃 (鎌を上げ、はた、と切る。壁と撞木落つ。)

途端にももの凄き響きあり。——地震だ。——山鳴だ。——夜叉ヶ池の上を見い。夜叉ヶ池の上を見い。夜叉ヶ池の上を見い。眞暗な雲が出た、——と叫び呼はる程こそあれ、閃電來り、瞬く間も歇まず。衆は立つ足もなくあわて惑ふ、牛あれて一蹴りに駈け散らして飛び行く。

鳥
笛

南地心中一戲曲一齣

場所 大阪天王寺境内

時 大銀杏の青葉の頃

人物 多一(猿廻し)

お美津(餅屋の娘)

鬼坊主塵山(高利貸)

五助といふ猿

伊吾、六平(ともに太鼓もち)

お 珊(寵妾)

駕籠かき

腰元

始め、其の銀杏の下に、五助猿のみ、うしろむきにて居る。

お美津、煮べものを入れたる重箱を提げていそ／＼出づ、と其の袖に搦むを撫でて見廻して、

お美津 まあ、多一さんも可い氣やかな、五ツちやんばかり残いて、何處へ行きなはつたやら……

今も犬の聲を聞いた。可愛げに追まはされて怪我などさしたなら何うする氣やかな。

敷莫産の上の太鼓を見て、一寸頂き、トトン、トトンと敲く。五助猿手振て踊る。

お美津 (笑ひながら手を上げて。) あら、然うやない。多一さんを呼びまんの。

猿チヨコンと坐る。其の頸を手でおさへて、トトン、トトンと鳴らす。

多一 誰やい、誰やい、又お寺の小僧めが悪戯するかい。(細く煙の立つ線香を手にして、小走り

に樹蔭に歸る。) や お美津さん来てか。

お美津 多一さん、何處へ行たえ。

多一 一寸、本堂まで拜みにな。

お美津 お、貴下、お母さんの回向やな、而してお手向けの線香買って來やはつたか。何處へお

笛 鳥 あげなさんすえ。私に供へさしておくれやす。

多一 其の銀杏の樹の空洞をなあ、差當りお佛壇、其根際へ立てて置かうと思つてな。

と云ふ内、お美津、線香を受取つて木の根に供へる。美しい後姿の白い頸脚を見ながら、其の優しさの身に沁みて早や涙ぐみ腕の處で目を擦つて、

多一 お美津さん、そして、和女よう私の母さんの命日を覚えてやな。

お美津 何にも知らん私やかて、貴方のおか、さん、おとうさんの精進日は覚えて居るえ。然もな、今日は祥月命日、多一さんは男ぐらしの一人、さぞかし、佛様へおもりもののお世話も成らんやろ。此方でがんどきなど焚かぬかとな、お爺さんが、恚う云うておくれやす。みつばやら、慈姑やら、蓮根をうでて、ちよきく切つて、昆布だし取つて、椎茸で味つけた。精一杯味ようたくつもりやけれど、私では齒痒いとてな、お爺さんが、昔は道樂に庖丁も持つた云うて、襷がけで料理方しやはつた。お初をば、あひやけで窮屈なやろけれど、内の御佛壇へ供へてな、お茶の御飯と一所にお重に入れて、恚うやつて、貴方のお午に持つて来たえ。先のやうに、毎日、日の暮方内へ寄つてくれはつたら、お爺さんと三人で一所に食べると嬉しいけれどな、此の節は、三日おき、四日おき、七日になつても、來やはらん。私は早う逢ひたうてな。今日もな、向うの方から、此の銀杏の梢が見えると、爪立つて駈けて来た。五ツちゃんばかりで居やはらん。其處らの店で、お午飯をば最う濟ましやはつたかと、精が抜けたえ、何が氣

に障つて來やはらんと、お爺さんも案じてな、私もな、店に立ちながら、もう見えるか來やはるか、日の暮れ方とは知つて居ても、それでも朝から待遠てな。

多一 あ、お美津さん、あやまる、拜む。これ見ともない。大道中で男をば泣かせて下さるな。先刻から一言々々堪へても堪へても、樹の蔭ながら大粒が、ほたりくと頬へ落ちる。これ何神様の罰が當つて、お美津さん、お爺さんに心持を悪くせう。此の銀杏の梢を離れてな、お日様が高津の前へお入りなされると、歸途を知つて五助が丁と背中へ乗る。

仕方をすると、五助猿、ひらりと負さる。

此悪戯め。(と振り落し)おもみは背中へかゝるけれども、足は軽く宙へ浮いて、目を塞いでもひとりでお美津さんが餅を賣る逢坂の辻まで夢中で行くけれどもな、和女の親を、恚う云うては濟まんけれど、何やると、料理店のあとを野原にして、行方知れずななつた親父さんの残いた借金の山を、和女が其のかよわい體一つに負うてな、お爺さんと二人苦勞するのや。入交り、恐怖しい、をぢさんが、雷様の太鼓のやうな印判やら、かぜの神の袋のやうな鞆を提げて、賣溜の錢さへ毎日のやうに攫へて行く。町の角からな、お美津さん。和女の顔と一所に、其の様子を覗くと、利息のたしさへ手傳の出來ぬ私が、何の面さげて、氣を責めて、足が竦んで立停つて、すごとくと木賃へ戻る。私が心にもなつてお見や。

お美津 え、其では家へ入らんと、いつも近所まで来やはるか。

多一 行かいでなるかい。

お美津 眞個に。

多一 其も二尺と三尺づつ、毎日よ、遠くからも様子が知れる。最う此處に怗う坐つて居てもな、金貸にせたらげられて、食つなぎの穀の代の外は、小遣もない迄攫はれて、和女とお爺さんが、起誓の祟ではなけれども、烏金で血を吐いて苦んで居やはる姿が、遠目金で覗くやうに見えるもの。私が稼いで密と和女の帯に挟む、お寶ばかりは、金貸の目を免れて、それ偶にはお爺さんの寢酒の一合にも成るによつて、石を粉に刻んでも、樂にしたいと働けれど、此の頃の、まんの悪さ、二貫と三貫さへ纏つた稼がない。今の先まではな、母さんの線香買ふ錢さへ残らなんだ。處が、今日は命日の、佛様のお慈悲やら、朝の間に發奮んだ客が立續き、五厘と思へば白かつたり、二錢と見るのが光つたり、石磨が廻つて、昔話の金子が湧く程、ざくりく。(と財布をぶちまけ筵の上へ錢を並べて)此れ見や、財布にやがて二兩。遣果した忠兵衛の二分ぢやない。儲かつた、儲かつた。これで花簪を和女に一本、御爺さんに五合や。今夜こそ久しぶりに飢ゑた餅、盆も正月も一息に頬張つて、和女に茶を汲んで貰はうと思ひ込んで居た處。いや、此も効性のない私より、然うして精進までしてくれる和女へ母さんの禮心で、私まで儲

かつたものである。お線香を買つて歸つて、此處に和女の居る姿を見たら、私や今の間に諸候に成つた氣がする。五汁三菜、猿廻しには勿體ないやうにもあるが、どれ、見るだけなと、ちやつと、見たい。

お美津 多一さん、今のを聞いてな。私、苦勞も心配も皆忘れて了うた。杯も添へて来た。お酒のあき瓶にな、茶を入れて持つて来たよつて、此處で、一寸なと食べておくれやす。誰も人は見て居やせぬえ。

多一 あ、眞個にな、不思議と今日は青葉ばかり、此の眞日中が寂然として、奥山にでも居るやうな、遠慮はないな。はじめようや。箸が二膳ついてあるな。

お美津 どないかした事やつたら、一所に食べたい思つたよつて。(と顔をかくす。)

多一 尤も、尤も。お持たせは其方でも、志は此方がする。母さんの祥月命日、和女がお客様や。

お美津 知らんえ。

多一 そんなら私が客の分かえ。さあ、膝に手をちやんとついてよばれませう。

といふ時、五助猿ちやんと並んで坐る。

多一 お相客は五助どん、お相伴をいたします。

鳥 笛
お美津 知らんえ。

多一 又これもお氣に入らぬ。がそんなら何うする。

お美津 貴方、二人ともお客やないものを。

多一 分つた。夫れでは和女の分は私がよそふ。私の分は和女がよそふ、な。

お美津 何うなとしたが、可うござんす。

多一 やあ、うまさうで、此は堪らん。(重箱の慈姑をしてやる。)

お美津 あれ、綺麗に詰めて置くものを。

多一 島田さへ寝て解ける。さし向ひに見得なし、見得なし。

兩人で木皿に取る。又慈姑を挟んで、

多一 それころ／＼。

五助に遣る。猿頬張る。

多一 さあ、お美津さん食べぬかい。

お美津 大事ないかえ。

多一 何が。

お美津 叱られはせぬやろか。

多一 誰に？

お美津 あなたに。(線香の煙を指さす。)

多一 (ほろりとして銀杏の根に片手をつき) もし、今日ばかりは迷うて出て、此の人を見て下

されまし。私より、貴女が抱いて遣りたう御座りませうな。さあ、お美津さん、一所に食べよ

う。

お美津 あい。(と莞爾と手を支へて) そんならお母さん、頂きます。

多一 恚うした處は、はじめてやな。

お美津 眞個になあ。

多一 此の嬉しいにつけて、胸に支へることがある。はじめて一所に御飯を食べるに、其が大道

やと思ふと、何うやら和女を、何時に成つてもお家さんに据ゑられぬやうで氣がかりな。此が

世を忍ぶ猿廻しで、一つ舞臺が廻ると、槍を立ててお駕籠の迎が來たら嬉しからうが、親の代

から此の猿曳。樹から落ちた人間や、和女に極りが悪いしなあ。

お美津 又あんな事を言ひなさんす。恚うして多一さんと居られたら、餅屋の店も欲しうない。

ほんに、此なり青竹を切つて來て、柱にしたら、何うやろな。

多一 そして人の入らぬやうに、注連でも周圍に張つて置くか。いや、然うすると、あゝ鶴龜、

人身御供のやうな形や。

お美津 二人で死ぬなら。

多一 え。

お美津 人身御供でも大事ないけれどな、もしや、それが七夕様で、年に一度より逢へなんだら、私や死んでしまふえ。

多一の膝に絶る。五郎猿、きやあとなく。僧形異體の高利貸、鬼坊主塵山、鐵棒の如き杖をつき、風袋の如き鞆を提げ、法體法衣にして、のさばり出づ。

塵山 コリヤ何うぢやい。餅屋の看板に羽が生えて、雲にも乗らずに、異な處へ飛んでけつかる。猿廻しの小丁稚と、銀杏の下に搦んだ形は額の繪が抜け出た體ぢや。やい、やい、お美津、可い加減に巫山戯さらさんと、面から裾まで金網で封じ込むぞ。疾とと歸りをれやい。

お美津 あれ、御隠居様。今直きに歸ります。

塵山 直に歸るではない、私が資本で賣らせる餅ぢや。南京まじりに、黒砂糖、何が味で人が買ふ？ 片時でも汝が居らぬと、餡は残らず蠅になる。私が取前は空になる。來がけに寄つて檢べて來た。賣溜はかけらもないわい。さあ、失せをれ。汝が髪の毛、百萬條、抜いても撈つても取らにや置かぬ。ちやと立てい。地體、借金で縛つた身體。無理に私が肩腰を擦らせうが、口を利すではなけれども、御當節ぢや、其は爲ぬ。約束なれど女郎にも爲ぬ、藝妓にも賣らぬ

かはりには、片時も店の番は休ませぬ。さあ、來い、やい、來い、巫山戯た女郎が。

多一 もし一寸、お美津さんの店頭で影を見ます。御坊様。

塵山 む、影を拜むか。其の度に赫耀として輝くぢやらうな。

多一 はい。

塵山 金の光りぢや。猿曳風情が目を潰すな。退つて拜め。何の用ぢや。

多一 此處に少々持合せがございます。これを差上げますよつて、最う些と、お美津を貸し下されませ。

塵山 兎や角言はず、先づ遣せ。

引さらつて、大鞆へたくし込む。お美津さしうつむく。

塵山 雑と、二兩か。

多一 はい、花簪と五合。……(とうつかりと云ふ。)

塵山 何を謔言を吐す。可し、料簡のならぬ所だが、今までの纏頭代だと思つて遣る。女郎、さあ立たう。

鳥 多一 え、矢張りお連れ歸りなされますか。

笛 塵山 頭を敲くな。知れた事だ。

多一 そりや酷うござります。御坊様、足りませぬか。

塵山 素丁稚め、鬼塵山を知りをらぬか。こればかり何になる。

此内五助猿這ひ廻り、銀杏の根の銅貨を銜へて来て、お美津に渡す。

お美津 おう。

と取つて、顔に片袖。多一と見合せ、涙ながら打背きて、掌に据ゑて塵山に差出す。

塵山 何だ、一錢。(と投げさうにして、鞆の口へ、ポンと入れる。)

これ猿め、後藤の目貫でも銜へて来い。

五助猿の頭を打つ。きやつと云つて多一に縋る。多一しつかり抱く。お美津泣き伏す、多一涙聲にて、

多一 もし、食べかけましたお美津の御飯が済みます迄、私もお茶漬にして、さらりと了ひますよつてな、其れまでお見免し下さりませ。

塵山 たはけも可い加減に盡せ。蓮如上人時分でも、大道中で飯事は成らんわい、來せう。

お美津の帶際を取つて引立てる。

お美津 (よろしくとして) 多一さんそんならえ。(ト聲がうるむ。)

多一 御坊様。(引立行く後に縋つて) 此上はお錢のかはりに、猿を一つ舞はせます。大事の藝で

ござりますが、猿がまるりて、此方の御知行、御壽命まさと祝ひます。お美津を一寸戻して下さりまし、もし。(と法衣の袖を引く。)

塵山 七面倒だ。五重の塔へ投放し上げるぞ。

突飛して、お美津の振返る足許を、どんと胸突に突く。

塵山 鬼塵山を忘れたか、乳房の眞中に穴をあけて、亡者のやうに引擔ぐぞ。(と追立つて行く。)

多一 すぐくと歸り、並べたる木皿を見て悄れ返り、銀杏の幹にもたれながら、手拭を目に當てる。五助猿も目をこする。屹と思直した體にて、

多一 いや、働け、働け、何でも働け。

慌しげに其の手拭で向う顛巻。急いで飯をかつ込んで、胸に支へ、むせかへる、五助猿、

其の背中をたたく。此の處へ幫間兩人。伊吾、六平。ばたくと駈出し、ばつたり留まつて、

兩人、おなじやうに汗を拭ひながら、ハツと顔を見合せる。

伊吾 南無三寶、鬼塵山に行逢うた。

六平 偉い事かな、もう些とで捉る處。

伊吾 や、きみは額の汗を拭くか。

六平 きこう、腋の下かいな。

伊吾 此方や、冷汗だけに借が多い。此のたらくとした工合が、澤山氣味の可いものではない。きみは額へ搔いただけ、然したる事はないさうな。羨しい。

六平 いや、然でない。腋の下のたらく汗、冷いはまだな事。此の額へクワツと出て、宛然一太刀浴びた形ぢや。鬼塵の利息ではないが、お互に目が出る、目が出る。

といふ折から、多一向う顛巻にて、トトントンと勢よく太鼓を敲く、吃驚して兩人一齊にストーンと尻餅。

伊吾 わあ。

六平 ひやあ。

伊吾 何ぢや、猿曳か。

六平 豪う、おどしくさつたな。やい。

多一 委細構はず。

多一 さあ、廻るは、トトントン、トトントン、廻つた、廻つた。トトントン、トトントン、小田原外郎口車。さあ、トトントン、トトントン、淀の河瀬の水車、お引トトントン、トトントン、

此内に幫間兩人、立離れて、多一にうしろ向きに立ち、何か頻に手眞似で囁く。吾助猿。そろくと後脚であるいて寄り、伊吾の袖を、ぐいと引く。

わつと怯えてべたりと尻餅。六平、これに驚き、同じくストーン。五助猿、ちやと莫産へ歸つて、トンボを切る。多一兩人の姿を見て、キョトンとして太鼓を止める。

六平 偉い事ぢや。

伊吾 何ないにする。

六平 命ばかりは助けて呉れ。

伊吾 しかし、吃驚三度の数が合うたわ。

六平 次手にも一つの役をのがれたいな。

伊吾 處で……猿曳——相談ぢや。

六平 何と、一口のるまいかな。

多一 へい、なんでござります。差當つて、無性やたらに金子が欲しうござります。御相談に乗りましたら、なんぼにかなりませぬか。

伊吾 分つてゐる。何でも相談と持懸ければ、いたぶられるに、こりや極つたものぢや。いや、若いもの、拔らぬわえ。

鳥

六平 けどな、骨折質の出しまへが大いと、其方の難が又可恐い。澤山はならぬぞ。

笛

伊吾 見得外聞は云はぬわい。これ、恥を言はんと理が聞えん。早い話が來る道で、鬼塵と云ふ

高利貸に捉らうとして怯えた二人ぢや。

六平 ために、太鼓の音にけてんして、腰を抜いたは見ても通り、豪い事云ふまいぞ。

多一 はい、花簪一本と酒五合買へますれば、一寸の間なら、死んでも大事ござりませぬ。と云ふ。兩人顔を見合せ、目を拭ひ、眉につばをつけなどして、

伊吾 あんた、そりや。ハナカンとかゴンとか云ふ、お錢の符丁かいな。

多一 餅は一盆づつ、附木の札が附いて居ります。符丁も何もござりませぬ。(と上の空なり。)

六平 あゝ、切餅一ツか。まさかに二十五兩ではあるまい。二貫と五百くれいぢやな。

多一 名は、美津と申します。

伊吾 はあ、切餅三ツ、七十五錢か。花簪に五合と、……成程、其處らが値段ぢやな。

六平 恚うつと、十兩一分三月縛りの利丈はある。些と、可恐くも、存するが。

伊吾 まあ、可えわ。百年目ぢや、千日前、木登をする危さには替へられぬ。出しますわ、あんな。扱て相談ぢやが、何と其の猿に木登りは出来ような。

六平 きこう、可い加減な事問ひなされ、木登りの出来ん猿と云ふが何處にある。

伊吾 然うやかて、樹から落ちた猿と云ふことがあるやないかい。

六平 夫れにしてから、登つたに相違ないがな。

伊吾 理合ぢやな。されば木登りは出来ると極めて、こゝに笛が一ツ。(と懐中から)こりや鳥の

聲。ピヨ〜と鳴く笛ぢや。猿曳さん。あんた藝を仕込んだ其の猿に此の笛持たいて、其處な

銀杏の樹へ登らせるぢや。よい時に手真似で暗號して。ピピーと吹かせる事には成らんかい。

多一 銀杏の樹へ、これを上げて、(引寄せて、つむりを撫で)鳥の笛を吹かせますか。

六平 それ〜、然うぢや。成るまいかな。

多一 え、お易い事ござります。

伊吾 知つてぢやろ。船場一の大金持、丸官さんの妾に、お珊さま、と云ふ御寮人が、太閤様の

淀の方ぢや。旦那にもまして我ま、でな。當節の自動車などは、血の道に障るとあつて、今日

あたり駕籠で乗り出し、先づ其は可。此の境内で、晝間時鳥を聞かうとある。

豪い無理ぢや。鳴かぬと申せば、女大名、信長公を極め込んで、六平さん、それ何とか云うた。

六平 うゝ、覚えありま山。鳴かずんば鳴かして見せう時鳥。と眉毛がキリ、としたと思へ。

伊吾 お妾を莞爾とさせる爲には、三千里さきへ蒞枝を取りに、早馬の策の、尖から狼火を揚げ

る、旦那のデレ方、此方ども二人で、内意ぢや。

六平 氣休めで可し、汝たち前へ廻つて、天王寺のあの、銀杏の樹の頂邊へ木登りして、鳥笛を

吹いて、お珊様にきかせい。二人のうち屹と申つけたぞ。可厭だと云へば、向後出入お差止め、

と参られたわ。昔から帮間の御難と聞えた、慈姑の鶉香。白玉の油揚。はさみ蟲のわさび醬油。それよりも、雲へ越す、銀杏の梢は可憐い。

伊吾 南無、此の大難救はせ給へ、と神佛を念じたれば、フト思ひついた今の相談。

六平 早速承知をしてくれて、何とも以て難有い。

伊吾 何分頼んだ。

多一 (此の時鳥笛を取つてピーと吹き) あんた、此の音が時鳥と聞えますか。

伊吾 其處はな、何とでも言抜ける。別して其れより、神佛の助けと思ふは。

六平 今も二人で言うた事。あんたの顔ぢや。

多一 可い加減な事おつしやれ。猿曳やよつて、猿に肖たかて、時鳥に肖た顔と云ふは、人間に

はござりませぬ。

伊吾 何のく。あんたの顔が、猿や時鳥に肖た言はうものなら、それこそ……なあ。

六平 お珊瑚様の、あの美しい歯で噛殺される。御寮人様が何とも以て御眞眞な、俳優にな。

伊吾 吃驚する程、よう肖てぢや。其を見せたら立處に癩癩も納まるでな。

多一 え、なぶるなら、もう聞きませぬ。

六平 いや、なぶるでないが。腹立つなら最う云ふまい。何分頼む。

伊吾 あれく、御寮人の駕籠が見える。

六平 それ、頼むぞ。

多一 花簪一本。お酒五合。よろしうござりますな。

伊吾 切餅三ツ、七貫五百、合點で居る。(と胸をたたく。)

多一 手にしたる笛を投げると、五助猿、これを拾ふ。多一眞似すると、猿、笛を銜へる。

居すまひをしゃんと直し、多一じつと心を入れ、目くばせして、

多一 お美津に働け。しつかりだ。ハッ。

と一ツ氣合をかけ樹を仰いで、策にて一ツ筵を打つ。五助猿、笛を銜へたま、するくと

昇つて木隠る。銀杏の葉高く動く。

伊吾 喝采。

六平 喝采々々。

兩人思はず手を拍つ。

駕籠舁四人。左右に島田鬚白丈長の腰元二人、附添ひて、盛装したるお珊瑚、乗つて出づ。伊

吾、六平駆出して、出迎へ、やがて其駕籠を昇据ゑる。

伊吾 (つくばひて) 御寮人様、些とお出ましに成りませぬか。

腰元一人駕籠わきに踞居て、お珊の意を次ぐ。

腰元 もしな、御寮人様はな。

六平 はつ。

腰元 時鳥を聞かぬうちには、垂も上げるな。とおつしやるよ。

伊吾 いやもう、鳥の方でもお待受てやら、先刻から鳴いて居ります、それ。

六平 な。(と耳を傾けるやうにして、多一に合圖する。)

多一、屹と梢を仰いで、仕方する。——笛の音響く。

伊吾 扱も、聲かな。

六平 時鳥々々。

腰元 申な。(と呼ぶ。)

伊吾 は。

腰元一 御寮人様かな、今鳴いた鳥は、あれは何や、とおつしやるよ。

六平 はつ。

腰元二 御寮人様かな、今鳴いた鳥は、あれは何や、とおつしやるよ。

伊吾 え、時鳥、時鳥にござります。

腰元一 もしな。

六平 はつ。

腰元一 御寮人様かな、今鳴いた鳥は、あれは何や、とおつしやるよ。

六平 え、時鳥、時鳥にござります。

腰元二 もしな。

伊吾 はつ。

腰元二 御寮人様かな、今鳴いた鳥は、あれは何やとおつしやるよ。

伊吾 え、ほと、ほと。

腰元一 もしな。

六平 へい。

腰元一 今啼いた鳥は、あれは何やとおつしやるよ。

多一 一寸……(幫間二人を見て)只今鳴きましたは、呼子鳥とおつしやりまし。

これを聞くと、兩人、一度に膝をたき、つかくと駕籠に擦寄つて、

伊吾 御寮人様、貴女。

六平 蘆之助に肖た如な猿曳が。

伊吾 今鳴きましたは、呼子鳥や、と申しまする。

お珊 分りました。氣に入つた。

と云ふ。駕籠の垂をあげる、と、顔に扇子を當てて居る。直す雪駄に、裾うつくしく片袂出づる時、其扇子に片頬かくる。すつと立出でさまに、しなやかに胸を摺つて、ツト立つと、袖づれに扇ばつたり落ちる。うっかりと、しばらく、多一の顔を熟と視めて、

あ、美しいぼんちやな。貴方、私は、恥かしい、人のおもちやの妾やよつてな。

澤山違ひもあるまいが、畜生に世話に成るより、些とは優え。旦那に頼んで屹度出世させてあげますわ、すぐにおいでなさいまし。一所に私と、一所に。

と云ひ、進みて、驚き呆るゝ多一の手を取る。

もしか旦那が肯かなんだらな、此の手をしつかり放さずにな、——放さずにな。——堅くしめて恍惚する。

公孫樹下

南地心中—戯曲—一齣

場所 逢坂の辻。——餅屋の店
人物 お美津（餅屋の娘）

傳五郎（お美津の祖父）

鬼塵山（高利貸）

丸田官藏（船場の豪商）

多 一（丸官の手代。もと猿廻し）

お 珊（丸官のおもひもの）

「鳥笛」

そのまゝ、續く。……

逢坂の辻。——餅屋の店

五助猿きやア〜と鳴く。

逢坂の辻、餅屋が小店の前なる撞木の上に此の猿一ツのみ、他に人影なし。

暫くして腰障子をあけて、お美津の祖父傳五郎、すぐみたる伸を打ち、いぢけたる欠呻をす。

傳五郎 あゝ眠つた事かな。お美津が留守は店が隙、餅もとんと賣れぬによつて、ついうと〜

とやつてのけた、……夢見て泣くやら笑ふやら、とんと身體を餅に搗いたが、此の餅には餡子

つけても黄粉まぶいても買手はないやて……孫の小遣にもならぬかい。

ぐつたり縁臺に腰を懸ける。縁臺は小さきを一ツ置く。

此の處へ、僧形異體の高利貸、鬼坊主塵山、片手に大革靴をさげ、片手に鐵棒をドウと突き、

お美津を追立て出で来る。

塵山 やい、のろいわ、ちよこ〜と刻まずに、大跨に急ぎをれ。

お美津斜つかひに取つて袖を壓へる、此の袂に、高津邊の蛇屋の蛇入れてあり。

お美津 まあ私はな、胸が痛うなるほど急いで居ますえ。

片手で胸を壓へる、其の時撞木にて猿が鳴く。

傳五郎 お、娘が歸つた鳴聲ぢや。

背後に迫つて来る塵山を見る。

ほい、こりやむごらしい。

縁臺にぐたりとなる。

お美津 お爺さん、今戻りました。あれ、鹽梅が悪いかい。

傳五郎 いや何でもない。これは……御隠居、御一所でござりますか。

塵山 一所も後生もあつたものか。途中で見懸けたによつて引攪んで戻つた……商賣に精入れず、

のらくと出てうせる……爺い、汝も汝ぢや、猿と一所に繋いでも置かずに、勝手に何處へ出してやる。

傳五郎 他と違ひまする、おまるぢや、信心どこでござりまするでの。

塵山 措けやい、何の信心ぢや知れるかい。

傳五郎 商賣繁昌と拜みまする、其の信心でござりまするが。

塵山 其の信心ぢやつたらな、駒下駄へらして歩行かすと、店の番をしてけつかれ。又ぢや、わ

ざわざ出向いて、堂、社に手を合さすと、日に三度三度顔を見せる、此の法體の佛を拜んで、
寢起の世話に附添うてな、其の手で肩腰をさすらうなら、何の苦界もあるまいに……心からぢ
や、これ、やい！ 今し方も船場のな、丸官が魚店の裏口を拜む處を、追立てて連れて來た。

お美津 一寸障子にかくれて、其の時、紙袋の蛇を疊の隅に置く。

塵山 那麼信心したければ、澤山せい。嚙御利益で商賣は繁昌ぢやろ、どりやく、例の通り賣
上げを檢べてくれう。

つかくと入り賣溜の策を覗く。

そりや見され、餘所の信心の利益はあつても、此の佛の罰が當つて、狀はない、些とも賣れぬ
が、まづ一ツ。

目筈を倒に革靴の口をパクリと大きく、打ちまけながら、

爺い、此では濟むまいが。くだいほど言うて聞かす、此のお美津が店に立つて客を呼びいで、
誰が來て餅を買ふ？……汝や居眠りでもしやせぬか、寢ぼけ面洗ひをれ。やい、出い。

お美津を店先へ邪慳に引立つ。

さあ喚け、半日なまけた埋合せぢや、これえ……呼ばれえ、餅買うてな、と鳴かぬかい。

お美津 あい、呼ぶけれどな、一寸待つておくれやす。

塵山 何を待てぢやい、もうこれ日もたんと明るうない。さあ呼ばぬかい。呼ばぬと、汝が尻踏
んで音を上げさせるぞ。

お美津 はい。

傳五郎 もし御隠居様、かはいげに、息せいて歸つてから、まだ湯を一ツ飲みませぬ。一息なと
息つかせてやつて下さりませぬか。

塵山 贅を吐かせ。何ぢや、歸つてから湯を飲まぬ、途中づから茶をくらつたか、茶の子飲んだ
か知れるかい、巾着見せろ。

お美津 あれ。

塵山 引搦んであけて見て、がま口を放り出す。

塵山 それ見をれ、小娘が、小袋の、小遣をつかひをる。油断のならぬ事ばかりぢや。汝等湯の
かはりに顔を干すぞ。やい、呼べ、呼ばぬかい……一見屋の格子から泣聲を出させぬ、此の佛
のお慈悲を思つて精出して、客を呼べ、それともお美津や……

ニヤリとして、
心を入れなほいて、此の佛をさすつてくれぬか。爺やい、そちら向け。……俺の方でさすらう
か。

お美津 可厭らしい、おいておくれやす。

とつんとする。塵山クワツと目を剥く。

塵山 さあ、呼ばれい、呼ばぬと、おのれ、たゞは置かぬぞ、佛の罰ぢや、もつと出る、もつと
出る。

舞臺の端近く鐵棒の先で突き出して、

やい、呼びをらぬか。

お美津 哀れに聲を上げて、

お美津 ——お寄りやす、餅お買ひやす、お土産買うておくれやす。——

五助 猿きやア〜と鳴く。

傳五郎 あゝ、夢になれ、夢になれ……こりや、地獄ぢや。

塵山 さて、取立てが又忙しい。阿魔、なまけるな、爺い、おのれにも言ひ付けた。

のそり〜引込みながら、尻目にじろ〜。

お美津 ——お寄りやす、お買ひやす、お土産買うておくれやす。——

傳五郎。よろりと立ち、塵山を彼方に睨む。

傳五郎 え、これを見て生命が惜いか、刺青にも恥しい、おれも男だ、眞裸、百貫屋の傳五郎、

も一度息杖持つてぬかい。

齒齧をなし、えい、と取つて、両手に縁臺を引上げむとして、一所にのめる。

ウム。――

苦しむ。

お美津かけ寄る。塵山つかく〜と戻つて睨む。よき程より、多一出で、塵山に氣をかね、こがくれ居る。此の時出ようとしてためらふ。お美津は塵山に睨まれて、おどく、傳五郎の肩を叩きながら、

お美津 ――お寄りやす、餅をお買やす、お土産買うておくれやす。――

塵山 忘れるな、汝が料簡一ツぢやわい。

大跨に歸る。

お美津 ――お寄りやす、……餅お買ひやす……お土産買うて……

涙に絶え〜となつて、傳五郎の肩に泣伏す。多一馳せ出で、舞臺の端にて、

多一 お寄りやす、餅お買ひやす、お土産買うておくれやす。

うるみ聲にて口惜しさうに、見えぬ塵山のあとを見ながら言ふ、五助猿駈け寄つて袂からむ。其の頭を撫づる時お美津顔を上げて多一を見る。多一目配せ、猿を追ひ遣ると、猿、撞

木の蔭に入る。其の時ツと寄つてお美津と並び――浮り片手づゝ、しつかり取り合ひ、二人片手づゝ、兩方、傳五郎の左右の肩を叩きながら、一所に聲を合す。

兩人 ――お土産買うておくれやす。――

傳五郎切なげに。

傳五郎 お美津。――

と呼ぶ。

お美津 あい、お爺さん、たんと悪いかい。

顔を胸へ宛てて顔を覗く。其の手を取り、また肩越しに、多一の手を、ひしと取る。

傳五郎 心持はもう可いが、お美津、多一どん、恠うして早く死水が取つて貰ひたい。

と泣く。背中と膝とに、二人とも泣き伏す。多一心付き、わざと笑顔になる。

多一 あゝ、餘り胸が充満で、思つた事も忘れて居ました。お爺さん、お金子が此處に二十圓計りござります。

懷中から紙入を。

何に使はうではなし、此方の世帯の手傳ひにと思ひますが、もう些と纏りませんと、些も極りの着かん事を存じて居りますから、しばらくは密としまつて置く、つもりではござりましたけ

れど、唯今のやうな様子を見ますと、聲を出して泣くものよりは、何にも言はぬ此の胸が、裂けるやうで、辛抱がなりかねます。あの、一寸延びれば尺延びるとか言ひます通り、此だけなりと、鬼坊主へお遣しなされまし。五日や七日は、お爺さん、あなたが手足を伸いておやすみでも、お美津さんがお手玉とつて遊んでも、冥土の使が、可恐しい、鐵棒ついで見廻りに來ますまい。どうぞ、然うなすつて下さりまし。

傳五郎 何にも言はぬ多一どん。

涙を拭ひ押頂き、

此をのめくと請取つては、お美津を餌にでもする様で、心には濟まぬが、の。今更湯をば水にする他人行儀な中ではない、志頂いた。主が情は駕籠を昇くより、鐘より重いけれど、お庇で肩が抜けた様に軽くなつた。後とも言はんで、此の足で一走りぢや。這奴、塵山の横面へ此の金子を叩き付けう……いや、婿どのが手柄の寶ぢや、恭しく遣はすぢやて。

お美津 お爺さん一寸、

わが袂を握つて、

あの、……

と多一に、

あんた、澤山のお金子でござんすな。つい、此間も十圓の上、其の今日も又……何うしてそれを持つておいでなさいますえ。

多一 何うして持つてと言つて、それは私に違ひはないもの。

お美津 それはな、あんたのに違ひはないけれどな。

熟と顔を見る。

多一 違ひはないけれどと言つて、お美津さん何の事や。

お美津 何うしてお金子をお儲けやししたえ。

多一 儲けると言つて、まだ追ひまはしの奉公中、自分で商賣のしやうはない、金子は御主人から貰ひました。

お美津 丸官の旦那さんかえ。

多一 旦那は大勢の奉公人、依怙最眞に、私に計り小遣は下さらぬ。が、御寮人様がお心づけ。

——多一や内證で——とおつしやつてな。

お美津 多一さん、内證でとおつしやつて……あの綺麗な、な。

多一 あの。

お美津 あの、美しい、以前は南新地で評判の藝妓さんの、御寮人、お珊様が、多一さん、内證

でとおつしやつてか。

多一 少時無言。

多一 は、は、……何やと思や、譯もないこと、お爺さん、憂慮はありません。早くおつかひなさるがい。

お美津 旦那さんに内證のお金子を、堅氣な奉公する人が、御寮人様に貰うても可い事か。——五ちゃん、お前はどう思ふえ。

後向きにツンとして故と猿に訊く、傳五郎笑ひ出し、

傳五郎 猿に相談、猿利口ぢや、丁ど可いわ。やい、お美津、爺の前で見たうもない、岡焼もち遠慮せい。秋刀魚は鱈と違ふ、故に長い。嬌々は悋氣を言はず、かるが故に深い中ぢやとの、塵劫記にあると言つて、芝居うらの講釋場で聞いて覺えた。氣は廣う持つたが可い。昔の武士ぢや、今の軍人と違つて、商人は利勘が先ぢや。下さるものは取つておけさの頼冠り。分けてあの御寮人様は、御自分がお見立てで、世話なされた多一どんぢや。蔭になり、日向になり、お心付下さるは、こりや當り前、何も不思議な事はない。義理がすまぬは私の方で、多一どん、此の金子の出し手には、濟まぬ事も遠慮もない。先づ一走り届けて來う、あとで喧嘩を、……必ず人に見られるな。

つか／＼行きかけて、やア、と後じさりに戻る。

多一 どん／＼、あれへ見えたは——丸官様ぢや。

多一 え、旦那様が……さあ大切な事を——私と言へば——うっかり忘れるにも程のあつた。

お留守中に用が出来て、お出先の茶屋へ駈つけたれど、今し方藝妓どもお連れなされて、逢坂の此處へ、紅葉見の酔ざましにお出まし、と聞いたについて、又走りまうて來たものを。

むかうを見て、

成程、大勢、綺麗なのが。……お、御寮人様も御一所に……

お美津 ほんに孔雀の中の、また天人、御寮人様は水際が立つて見えるなあ、多一さん。

多一 黙つて一寸つむりをかく。

傳五郎 あの御同勢が、此處へお休みにならうも知れぬ。お美津一人ぢや手が足りまい、どれ、裏の井戸端へ行つて、茶碗の洗ひ方なとしようかな。

手桶を提げて小家の外圍について入る。

お美津 あんた御寮人様がおいでやよつて、嘸、嬉しからうな。あ、羨ましい、え、口惜しい。

手拭を丸げて投げる。多一は改りたる體、且つ慌しげに、

多一 お美津、お美津といふになあ。これ一寸、意地の悪い、いろく様子もある事で、御寮人様には、あんたと私が眞の兄妹や言うてある。御寮人様も、些ともそれを疑うて居なさらぬ處を、かれこれがあつては、えらい濟まぬ事ばかりになるよつて、これ頼む。そんな事はんと置いて、——そしてな、……此處に立つて待つて居ては工合が悪い。あとから駈け着けた分にして、御機嫌を見て旦那に用を言ふつもり。あれ、もう見える。私は一先づ裏口へ入るによつて、もしかお休みなさつたら、あんた、もてなしをよう頼んだ、え、可いかい、これ。
お美津不承々々に頷く。多一は姿をかはして入る。と猿すがつてからむ、抱いて行く。
お美津一人立ち、其方を見込む。

お美津 お休みやす……

呼び懸けて、すねた様子。ツと店へ入つて、餅を賣る棚の蔭に、うしろ向く。

此の折から、丸田官藏、大生醉。眼の血走る酒亂の形相、年増の藝者二人、若いのが二人、仲居一人、花やかに連立つたる、其の若い妓二人は、後じさりに一人と手を組み、手車の眞似す。其の中へ入りて、丸官、手を振る事泳ぐが如く、大聲にて喚きながらよろめき出づ。

丸官 誰のく手車ア——誰のく手車ア——とけつかるわい。汝等これ、鈍太郎どのの手車ア、丸官様の手車ア——と囃さんかい。

お珊は一行より少し遅れて靜に出づ。

やい、囃せと言ふに。

と強く言つて、

誰のく手車ア。

藝妓達 鈍太郎どのの手車ア。

丸官 誰のく手車ア。

藝妓達 丸官様の手車ア。

丸官 わは、は、は、は、。

と身體中ゆすり笑ひをして、どつかと床几に倒れ込み、いきなり大の字。

こりや、とんと、己が家の下雪隠といふ掘立小屋だ。壁を突抜いても此の人数は休まれぬ、お珊は此處へ來い。

と床几を指す。

お珊立どまる。

仲居 御寮人様あれへ、

と小腰を屈めて言ふ。

お珊は無言にて丸官の枕頭へ斜に懸ける。

丸官、直ぐに其の膝に肘をかけながら、

丸官 汝等は皆、一足前へ去んで榎佐で待てい。此の處、豊臣太閤、さし向ひでおはしましたい。

むら／＼と目に邪魔ぢや、行きくされ。

藝妓達 お珊さま、お先へ。

仲居 おゆるりと。

皆々もみぢの立樹に木隠れ行く。

丸官 あの娘、茶をくれ。

お美津 はい／＼。

と片だすきにて盆に持て運ぶ。

お珊は會釋して顔を見る。

丸官、茶を一息に飲み、吐き出して、

丸官 熱いわい、火傷をさすか。信長公に獻する茶は、初手は生ぬると極つたものだ。汝も出世の出来ない奴だわ。

と茶碗を投げる。

お美津ハツとする。

丸官 やあ、可怖がる事はない。よい娘だ、此處へ来て足をさすれ、大きにだるいわ。船場の丸官の足だ。黄金の延棒だと思つてさすれ。さすらぬかい。

お美津ためらひながら、やがて下に居てすなほにさする。多一、小腰を屈めて出で、土に手をつくやうにして、

多一 旦那様。

丸官 や、多一だな、わりや。

多一 はい、お使ひに参りましたござります。

丸官 何の使ひぢや、もつと、近くへ來い。

床几に引寄せ、多一の低聲にて口上言ふを――

ふ、ふ、ふ、ふん、

と鼻で聞いて、

こうれ、旦那のな、旦那の、此處に居るのが何ないして知れた。……ふ、ふ、ふん、ふん……

え、愚圖々々吐すから酔うた頭がむしやくしやするわ。お珊、ちやと膝枕をさせぬかい。腰かけたるお珊の下搔の棲を、下締なりにぐつと掴んで、引摺り寄せると、冷いやうな水淺

葱の縮緬の扱帯はらりと亂れて、友染の長襦袢すらりと成る。其の膝へ、丸官石頭を、ぐわつしと乗せ、萌黄色の靴足袋を、ぬい、と蹴て伸ばすと、足を擦り居たるお美津はたと轉ぶ。やあ、多一、そんな用事よりは、うぬが惚れた女を、こないされた處は、どないな氣がするのや。

と、ふんぞつて言ふ。多一ふるへながら、

多一 早くお茶を……な、それ、ぬるまにして。

と目くばせして、お美津を店の内へ立たせる。

お珊は、柳の蜘蛛に這はる、如く、なよ／＼として丸官の自由になる。丸官、無慙に解けかかりたるお珊の下締を、手に搦んでひねくりながら、

丸官 不義ものの白い胸を搔ッさばいて、蒼い腸を引すり出したやうな、此の狀を何と思ふ。うむ、多一、やい、多一。

と言ひ／＼、ぐい／＼扱帯を引出しつゝ、ごう／＼軒をかく。お珊は面を背け、黄金の煙管にて煙草を燻らす。

多一、黙つてさし俯く。其の肩わな／＼。傳五郎出でて、こがくれながら、憂慮しげに此方を覗ふ。

丸官 暫くありて、伸をして、お珊の膝に半ば起き、

丸官 口中粘ついて、あゝ、かなはん。水菓子ないか。うゝ、其處に柿がある。餅屋の阿魔、皮剥けい。

とお美津に言つて、多一をじろり。然も輕侮したる體にて、汝や何しとる。

多一 はい、旦那様お目覺遊ばしまする迄、お返事をお待ち申しましてございます。

丸官 何ぢや、返事を待つた。間抜け。……汝が今し方の口上は何と言つた……心齋橋の糠甚が勘定を取りに來たで、何ない計らひませうと吐いた筈だ。な、旦那の耳が違つたか。

多一 仰せられます通り、心齋橋の糠甚様御自身おいででございますによつて、如何計ひませうか、思召しの程を伺つて參れと、喜兵衛どんが申されますので、急いで出ましたのでございませう。

丸官 黙れ……やい、つべこべと、それが間抜けだ。分らんか。これ勘定欲しい、と取りに來た金子なら拂うて與らすは知れた事だ。何吐す……たかが三百や五百の金子、うんもすんもあるものかい。紙幣の束で鼻かんで、糠甚の頬げたへ敲つけろ、と番頭に然う吐かせ。

多一 はい、はい。

と手を支く。

丸官 早う去ね、こない場所へ、のこくと生白い面出しくさつて、早う去ね、去ねやい。

多一 はい、それでは五百圓、仕拂ひますでございます。

丸官、黙つて頷く。

多一 御免遊ばしまし。

と行きかける。

丸官 多一、多一、多一、多一、待てい。

多一 はつ。

と引返して又手を支く。

丸官、お珊の膝を腹這ひに乗出す。

丸官 えい、……と其何ぢや……心齋橋の糠原甚兵衛、糠甚が金子くれい、五百圓拂うてくれいと、使が来て店で待つぢやな。

多一 はい、先刻からお待ちなされてでございます。

丸官 ふむ……いや向うから来たら催促や、催促ぢやい。これ、誰だと思ふ、丸官だ。……此の丸官はな、催促されて金子出した覚えはごあらん、へん。

お珊の顔を見て、

寄越せ。

とお美津が此の折から剃いて立ち寄る、其の柿を引手繰り、丸嚙りにポリくと食ふ。

お珊は初めて袂を合せる。

多一 うつむき居る。

丸官 更に險しき顔して、じろりと多一を睨めつけて、

丸官 何しとる。汝や其處に何しとる、これ。

多一 え、それでございますれば、番頭さんに、其の通り申しますでございます。

立つて行きかける。

丸官 丁稚々々、素丁稚。

と又呼ぶ、多一立停る。

やい、白丁稚……へん。

とお珊の顔をじろり。

丁稚、待て。

多一 引返して三度手を支く。

丸官 これ、汝や、おはいくで、用をすまいた顔色で、人間並に、足ばかりで立つて行くが、歸つたら番頭に何と云うて返事する氣や。何だ？……拂ふな、と俺が言ひつけたから、其通り申します、申しますが聞いて呆れるわい。これ、條理のない金子は取りにや來ん、取りに來た金子は拂はにやならん。これ、拂ふべき金子を拂はいで、主人の一分が立つと思ふか、五百圓や七百圓の、

大聲になり、

端金で、

と底力を入れる。

喃、端金を、あゝも恚うもあるものかい。俺が拂ふなと言つたかて拂へ。さつさと一束にして糠甚に突附ける……歸れ、大白癡、其の位な事が分らんか。

傳五郎、見かねて氣を揉み詰め、又肩を抱へて撞となる。

多一、此の中にもハツと驚き、手眞似でお美津を其方へやりつゝ、

多一 鈍な私でもよう分りましたてございます、はい、畏りました。

と立ちかける。

お美津、此の時傳五郎の肩を擦つて泣く。

丸官 待ちをれ、分つたと言つたな……分つたか。

多一 分りました。

丸官 何、分つた、偉い！ 出來す、ふん、分つたら言つて見い、歸つて何と返事をする。

多一

丸官 しゃべらんか、しゃべれ、一應は聞いて置く。丸田官藏、丸官、後學のために承りたい、ふん。

鼻を仰向け、耳を多一に突き着けて、あり合せたお珊の黄金煙管を握つて、立續けに吹かす。

其の吸口にてお珊の頬のあたりを、ぐいぐいと邪険につゝいて、

これ、どんな氣がする。

と、ニヤリと笑ふ、お珊うつむく。

多一 おどくししながら、

多一 あの、番頭さんに……あの、

丸官 判然言へ、ちやんと口上を以て吐かせ。うん？

多一 番頭さんに金子をば、其の、あの、

丸官 番頭に……、金子を、金子。

多一 あの、其の拂ひますやうに……

丸官 何だ、金子を拂へた、だ、黙れ……沙汰過ぎた青二才。

おそろしき顔になり、

誰が、……

と吠えるやうな聲して、

誰が拂へと言った。誰が、これ、五百圓は大金だぞ。丸官、たかを聞いてさへぶるくする。

これ、この通りふるへるわい。

胴肩を一ツに揺り上げて、

大膽ものめが。土性骨の太い奴や。主人の物だとたかを括つて、大枚の金子を糺とも槽とも思

ひくさらん。汝や、天王寺の銀杏の樹の下に筵敷いて、猿を廻いた、乞食の時を忘れたか。

多一泣きながら、

多一 御免なさいまし。

はつと退いて突伏す。

丸官 あやまるに及ばん、よく考へて、此處は一ツ何と計ふべきか、其處へ啖ひ着いて分別して返答せい。石になるまで、——汝や動くな。

くるりと柿を引手繰つて、かつくと喰ふ。

多一身悶えしてゐざり出づ。

多一 旦那様へ。

丸官 早いな、汝のやうな下根な奴には、三年掛らうと思つた分別が今の間に着いたは偉い。俺を呼ぶからには工夫がついたな、先づ褒美をやる、そりや、頂け。

柿のたねを多一の頬へ叩き付ける。多一身も世もあらぬ状して震へながら、

多一 御寮人様、

と言ふ。お珊じつと視る。

もし、何うしましたら宜しいのでございませう。

そつと袂に絶る。

丸官 猿曳きめ！ 汝や主人の見る前で、俺の妾の膝を抱いたな！……畜生！

喚くや否や、伸懸つて、雁首高く、多一の額を打つ。

お美津、はつと泣き伏す。

傳五郎其のお美津の手を取つて、とぼくと床几の前へ出で、踞る。

傳五郎 はい、御免なさいまし、これは餅屋の爺にござります。申上げまして又何かお氣に障ら

うも知れませぬが、其の多一どんは、此なるお美津と前々から堅い約束がござりましてな、はい、爺が見極めて居ります。なか／＼餘所心のあるやうな若い衆ではござりませぬ。お内様へ奉公大事に、狗の子ほども目鼻があく様になりましたれば、一日半時も早う夫婦にして遣りたいと、そればかりを樂みに生きて居ります。どのやうな仕損じ致いたかは存じませぬが、七十になります爺に免じて、御料簡下さりまして、尙この上とも、御不便をお懸け下されまするやう、もし、拜みます。旦那様、此の通りでござります。

と頭を下げる。

お珊思はず聲を懸け、

お珊 兄妹を夫婦にするとは、あゝ、汚らはしい。ほんの當座の紛らかしにも、そんな畜生のやうな事、言ふものぢやござんせぬ。

と袖を拂ふ。

傳五郎 へゝゝゝ、若いものが、朋輩衆へも極りの悪さに、夫婦とはよう申さぬのでござりませう。猿が鶴になる法もあれ、滅相な兄妹ではござりませぬ。

お珊、ものも言はず、我が手を引きしめて胸を抱く。

丸官心とけて高笑ひ。

丸官 はゝゝゝ、約束した女の外に、何にもさらす働きのある丁稚でない。やい、それで分つた。番頭の用事を得たり賢しで、此處の娘に逢ひに來たのぢや。今日の朱葉見は、初手お珊ばかり出る處、中途から俺が連れ立つた。——それを知らずに、多一めが、あひゞきになど、申合せてうせたとおもうた。うむ、療治代は小遣。追つて、しこたまくれて遣らう。あゝ、氣が盡きた、お珊早う榎佐で飲み直さう。

むつくりと起きて立つて出る。

お珊 あゝ、つむりが痛さうな。

額を抑へたまゝ俯伏し居る多一を見る。

お珊 旦那、あなたのしそこなひ、私が一寸介抱する。

懷紙を疵にあて、扱帯を解いてしつかり捲く。

丸官 これ、でれ／＼と何するのや。

お珊は柿を剥きたるお美津の小庖丁を、ツと取つて、

お珊 介抱したが悪かつたら、何うなりとしておくれやす。

と突きつける。

丸官一足さがる。

と言つて、抱きしめる。

お美津 はつ。

と泣き伏す。

多一 五助の手を引いた儘、其のお美津の背を撫でつゝ、片隅なる件の紙袋に目を着ける。

多一 お美津さん、あんた、蛇屋の蛇買うたかい。

お美津 え。

多一 顔を上げ、憚る色する。

多一 隠さずと大事な、私も買うた。

袂にさげて居て、先刻傳五郎の肩をさする時、縁臺にさし置いた風呂敷の包をとつて上げる。

同じ一包の紙袋。

これ見ておくれ……一時も早う出世して、あんた達二人に苦勞させまいと、精一杯禁厭はしたけれど、勝手に店があけられぬ。……高津の蛇穴へ夜さり持つて行く事が出来ぬによつて、他人に頼まれるものではなし、あんたに一ツ相談や。よい次手と思つて持つては来たが、途中やつと気が付けば、あんたは古今の蛇嫌ひぢや。こりやもう氣ふりにも見せられぬと、考へなほして居たところ、今さららしう、何のための願懸けぢやなどと、あらためて聞きはせぬ。……

よう、あんた、其の袋持たれたなあ。

お美津 蛇をいらふ女子やと、氣に懸けて下さいますなあ。日増に思ひ迫つたよつて……目も塞がずにうけて来た。多一さん、あんたと一所になれるのやつたら、蛇の穴も、蝮の巢も……

多一 火水の中とて……私も同一ぢや。五助や、私等の手を曳いて、奥山へなど、

お美津 野末へなど、

多一 連れて行つてくれぬかい。

お美津 や、はんが出来たらば、同じ名をつけような。

多一 おゝ、大分、其處らにちらりと灯が點いた。

お美津 内も灯をともしような。

多一 いや、もう少しと暗い方が、人に顔が見えいで、可い。

お美津 どんな人より、御主人に見えると思ひな。

多一 當前、身の上や。

お美津 御主人より……御寮人様になあ。

多一 又お美津さん、それを言ふ。

お美津 あんた、御寮人様は……美しいな。

多一 や、何で人の風説をする。……お美津。あれ、御寮人様が引き返して——向うから。

お美津 そしたら店の戸をしめて、中から鍵を懸けようかえ。

多一 申戲やない、眞個や。それ腰元の勝に、もみぢの枝さげさせて……やア衣の綾、帯の光、

あの袂捌きは御寮人様。あ、ひよんな處へ。兄妹でないのが知れた上、こゝに居る處を見られては、え、飛んでもない、こりや何うする。

お美津 私が居ては悪いやろ、此處は私の内でござんす。些とも私は恐うないのえ。

多一 奉公の身おや、堪忍せい。え、もう其處へ。それ、こりや動くと尙ほ見える……もう一間

奥がない事か、お美津何うしよう……え、鈍な。空の長持も持たぬ家やな。飯櫃の蓋などあけぬか。鼠になつても隠れたい。猿の形が羨しい、南無三寶、目の前へ天降つた。

慌てて縁の下へ身をもぐる。

お美津、素知らぬ顔して舞臺の端近に出でて、

お美津 ——お寄りやす、餅お買ひやす、お土産買うておくれやす。——

お珊ほ、笑みながら、

お珊 一寸又寄せてもらひに來ました。餅を買ひませうな、お土産買ひませう。

店頭へ立つ。

お美津、氣を呑まれた顔色にて顔を見る。

お珊 あのな、別に挨拶はせぬけれど、最う貴女とはお知己。先刻は連が連やによつて、よう言葉も交はさいで、残り惜しう思ひました。今度はゆつくり話をしような。

とすまして言ふ。

お美津、今の其のゆつくりに、心あわてて、

お美津 御寮人さん、申譯がござんせんが、あの、私は精出して、商ひせんとならんよつて、ゆつくりお話も聞かれませぬ。御許しやす。……あ、——お寄りやす餅お買ひやす、お土産買うておくれやす。——

と氣もそゞろに呼ぶ。

お珊 必ず商ひの邪魔はせぬ、休まして貰ひます。

店の一問へ入りさうにす。

お美津おどくして、

お美津 これへ、お懸けやす。

縁臺を取つて寄せる。

お珊 あまり端近や。ほ、これは貴女の方で言ふ事やなあ。

つか／＼入つて、腰を懸ける。

お美津 あれ、御寮人様、這麼しゆみた店やよつて、敷かせます座蒲團もござんせぬ。お腰が痛うござんせうに、縁臺の方がましやよつて、此處へ懸けておくれやす。

お珊 何のあんた、此の床は算盤責、膝へ石を抱かされうと、可愛い、……いゝや、かはつた人の見て居る前で、厭な旦那の石頭で、膝枕をされました。筋も骨も碎けるやうな苦しさ、つらさ、術なさにくらぶれば、冷たい板も羽蒲團、眞綿より柔かい。慥うして茶店の店先で、女が膚を見られるやうな、恥しい、口惜しい、無念な思ひをさせられても、凝と私は辛抱した、凝と堪へた。誰の爲と言ふでもない、自分が果敢ない妾つとめのせるなれば、自業自得と斷念めるが、あんた見て知つてであらう、察してくれたが可うござんす。

多一其の時、縁の下より手を出し、お珊の足を取つて押し頂く。とお珊、はつと、勿體ない、と言ふ思ひ入れにて、

お珊 一ツ飲んで、胸が切ない、お、辛度。

足を揃へた儘、斜に横坐りに兩膝先へ、腰を捻つて、疊に上つて、疲れたる風情に、がつくり手を支く。と、其の手、蛇を入れたる袋に障る。凝と見て、屹となる。

お美津 御寮人さん、私や、むごい、辛い情ない事を見てなあ、那麼悲しい思ひをするほどなら、

それなりに死んだが増と思ふよつて、あんたの、其の、お心を察して居る間もござんせんえ。

お珊 あ、可愛らしい、美しい姐さんが、那麼愛盡しな不人情、言ふものぢやござんせぬ。

お美津 はい、どうせ私は不人情、人でなし。——あんたのやうな、なあ、五ツちゃん。

猿に近々と顔を寄せて、

五ツちゃんも黙やよつて、御寮人さんの心は知らんやろ。私も知らんえ。

お珊 無理はない、お美津さん、氣に障つたらお許しやす。あんたの名もちゃんと知つて居る……少し考へがあつたよつて、多一さんのあゝした處を、故と黙つて見て居つた。

お美津 よう名を覚えておくれやした。私は美津でござんすけれど、多一さんとやら、言ふ人は、御寮人さんの可愛いお方、私には知らぬ他人でござんす。

お珊 其のあんたの他人をな、改めて介抱もし、お詫も屹とするつもり。お美津さん、堪忍しておくれやす。……仲直りに酒とも言へぬ、湯なと一ツ、あんたの手からおくれやすな。

お美津 湯はまだ沸かぬ、冷たうござんす。

お珊 水なりと欲しいなあ。

と凛々しい聲。

今此處へ手をついたら、對の袋の中が動いた、びく／＼と、二ツ動いた。

お美津 え。

お珊 もう、これが身體へ響いて、血が騒ぐ、身が動く。

と丁と膝もて床を打つて、

筋が引きつる、胸が震ふ、動悸が打つ。先刻に變らぬ思ひがする……水など飲ませておくれやす。

お美津 手桶にござんす、めし上げられ。

お珊 いゝえ、お美津さんの手からでないと、此の胸の苦しさが休まらぬ……あなた、多一さんは醫者にも懸ける。私が附添つて介抱する。其の上に、お詫には、二千圓が三千圓でも大事な、店の餅を皆買はう。商賣を休んで、なかよう話をおしやすな。

お美津 私や、貴女に、あやかりたい、お羨しうござんす。餘所の人の介抱が、したければなさいます。附添ひたければ、お附添ひ。一ツ五錢どりの餠餅、それをば二千圓、三千圓、五千圓にもお買ひなさんす。……那麽御寮人さんを知己にお持ちやして、あの、餘所の人は、嗚々々定めし嬉しかる。……あゝ、情ない。私はな、附添ひたくも、介抱したくも……世間をかねて口も利かれぬ。口惜しいな、二千圓三千圓五千圓の餠餅を、一錢二錢賣るために、お爺さんの肩もよう叩かずに猿より哀しい聲で泣く。……しがない、果敢ない、働きのない、此身は

畜生に劣つてもな、女の一念これお見やす……お醫者さんのお使ひも出来ぬかはり、せめて何處かの人さんと、同じ痛いめして見せる。

小庖丁を拾つて取り上げ、袖を開いた雪なす小腕、二の腕へ切尖で、一文字にさつと血を引く。手拭とつて、しかと押へ、口に片端くはへながら、

あなたが餘り羨しい。仕方や形には出来いでも、眞實ばかりは負けはせぬえ。餅を買うておくれやすなら、極めた値の、端錢で買うておくれやす。……一厘二厘の儲けを溜めても、大事な人に、煙草位は買ふのでござんす。眞個に、御大家の御寮人さんの美しさに見惚れすと、餅屋の娘は、商ひに精を出そ。

つかくと端へ出で、此の時自信のある聲にて、

——お寄りやす、餅お買ひやす、お土産買うておくれやす。——

多一 たまり兼ねて、縁の下よりわな、きつ、出で、

多一 お美津!

と呼んで、

生命はいらぬ、殺してくれ。

直に、はたとお珊の前に手を支へる。と、五助猿、並んで同じく手を支く。

もし、御寮人様、お助け下さいまし。
と切なる聲。

お珊瑚凝と見て笑を含み、

お珊瑚 多一さん、殺しもせぬ、が、助けもせぬえ。

多一 然やつたら、私のからだは、どないな事になりますやろ。

とあまりの事に、多一、きよとんとしてぞ居たりける。

お珊瑚は無言にて、それまで傍にじつと手を支へ控へたる、腰元の耳に口して打囁く。

腰元 はい。

急ぎ足にて駈け行く。

お珊瑚 お美津さん、もう何にも言はずとな、此處へ来て。……

精一杯、言つてのけたあとなれば、弱き娘の氣ぬけのしたる様なるを、傍に寄せ、改めて

多一に向ひ、

あんた、殺しもせず、助けもせず、何ないと言ひなさんす。

多一 へい……

とまだうっかりして居る。

お珊瑚 そしたらばな、宙へふらふらと釣つてあげるわ。

と又微笑む。

多一 へい、宙へふはくと上りますか。然やと、幽霊になりますか。

お珊瑚 確乎おしやす。多一さんが幽霊になんはると、お美津さんが化けて出なんす……お、こは。

と顔をかくす。

腰元先に立ち、駕籠昇附添ひ、駕籠を二挺釣つて出づ。

お珊瑚 さあ多一さん、お美津さんも、宙へ上げるが不承知かい。何にも言はずと私の寮へ透られ

やす。

お美津、多一顔を見合せためらふ。

お珊瑚 不承知かい、南地の珊瑚が生命に懸けて、屹と二人を添はせるえ。

多一、お美津に目くばせして乗れといふ。

お美津 貴方、行つても大事ないかい。

多一 豫ねての約束、私と一所ぢや、火水の中も。

お美津 あ、眞個にな。

駕籠に雙方乗ると、五助猿、お珊に叫び懸る、お珊身をかはす。

多一 五助。

お美津 五ツちゃん、おいで。

と制して駕籠にて呼ぶ。五助猿走りつく。二人じつと見る。此の間駕籠ためらふ。傳五郎ひよろりと出で、仰天す。

傳五郎 わい、又夢か。何が夢やら娑婆やら分らぬ。目脂を取つて頬にみひらく。

お珊 お爺さん、私が待女郎も、媒妁人もして、お二人さんを祝言させます。一寸貸しておくれやす。

傳五郎 此や夢かいな、娑婆かいな。

お珊 お見やす、輿入の駕籠が揃うた。

傳五郎 やあ、お美津、多一どん、めでたいわ。大阪一番南地の伊達者、お珊御寮が請合うた、夢でも段ない。

勇んでお美津の駕籠わきへ。——此の間、お珊は、人知れず蛇の袋二ツを取つて、思入あり。兩方の袂に二ツづゝ入る、時顔色凄く、凝と駕籠を見る。

傳五郎 こりや若いもの息杖かせ。孫が一世一代の祝言と聞いて腰が立つた、花婿祝うて一肩にれるぞ。

多一 あ、滅相な、勿體ない。舅、兩親、一ツに合せたお爺さん、駕籠をかつがせてなりますか。

傳五郎 む、商人、分別あるな。可いわ、夫婦に分けへだてはないけれど、血を分けた孫娘、私が身體も同じこと、一番、お美津を背負つて立て。

お美津 あれ、お爺さん、勿體ない。

傳五郎 えい、えい、亭主の口眞似するわ。やい、われが、お苺盆盃時分、兩足あげて、此爺に猿おんぶで、ほい駕籠見たこと忘れたか。

お美津 知らん——

と兩袖で顔をかくす。

駕籠昇一 お爺、あぶない。

同二 あぶないく。

下樹孫公
傳五郎 やあ、今時分の若い奴、百貫屋の傳五郎忘れたか。這麼時の役に立たいで、何の爲に駕籠屋に生れた。やつとまかせの、どっこいな。

と肩を入れる。

お珊腰元の持つたる、もみぢの枝を兩人の駕籠に差しして、

お珊 後にえ。

と見送る。駕籠入る時、鬼塵山、どたくと出づ。

塵山 十兩や十五兩で、身抜けさせる奴等でない。娘は娘、金子は金子。お定りの顔を見に来たれば、おのれ等、おのれ、何處へ失せる。晝強盗のやじり切り、貸し金で縛つた身體を、足腰もあがかさうか。

と追ひ継らむとす。

お珊、入身に遮つて、すらりと立ち、

お珊 砂が立つ、騒々しい。琵琶の湖、埋まるほども貸したかえ。

塵山 何だと。

お珊 其の革靴ぢや小さからう、入れものの口をおあけ。

と紙入を取つて俯向けると、塵山、吃驚して大革靴で受ける。金貨きらめき出づ。

塵山 わあ、金貨だ〜。

絶叫す。

お珊 紙入ごと抛り込み、
お珊 足りぬかい。

簪を抜き、珊瑚の根懸けを打込む。其の時、お珊の黒髪亂れる。

塵山 古渡り八ツ、翡翠の簪。

と言ひく、くたくと革靴に重みの懸る體にて尻餅を搗く。お珊の黒髪亂る、途端に、背景の大阪城あらはれ出づ。猿飛びつく。お珊屹と見る、と猿すくむ。城の櫓に、虹か、つて、樹立を彩る、もみぢの錦、お珊の衣に照映ゆる。お珊毗を城に向けて、一枝もみぢをかざしながら――

お珊 お、姉さんのやうに思ふ、太閤さんの淀君の、お城に虹が懸つたな。

東京府規格外許可用紙第一〇九號

出文協承認 了 60241號
7600 部

昭和十七年八月二十六日 印刷
昭和十七年八月三十一日 發行



發行所

東京市神田區一ッ橋二丁目三番地

岩波書店

電話九段(33)一八七番(4)
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

著者

泉鏡太郎

發行者

東京市神田區一ッ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市下谷區二長町一番地
井上源之丞

印刷所

東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社
(東京二二二)

(凸版製本)

鏡花全集 第二十五卷
會費 貳圓六拾錢

小店の出版物に就ては永らく責任を負うべきでない
かたがた申出へ店小接直は合場の等丁亂・丁落らか





